

ラグビーワールドカップ 2019 における児童生徒の意識の変容に関する研究

—福岡会場観戦招待事業前後のアンケート調査から—

長期派遣研修員

福岡県立太宰府高等学校

教諭

山本 崇弘

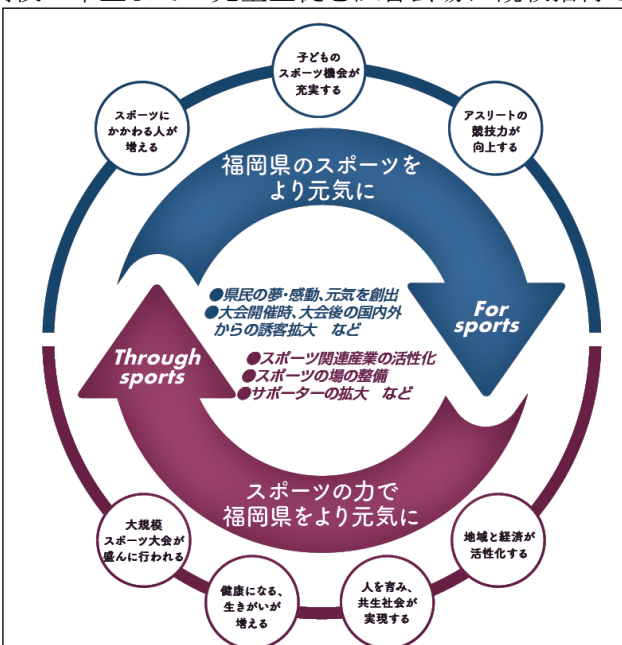
I 主題設定の理由

1 スポーツの動向から

我が国では、令和元年に、ラグビーワールドカップ（以下「RWC」という。）2019が、令和2年には、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会（以下「東京2020大会」という。）が、さらに令和3年には、ワールドマスターズゲームズ2021関西が開催される。他にも、各競技の国際大会や大規模国際スポーツ大会が国内で継続して開催される状況は、我が国のスポーツがさらに発展する絶好の機会と捉えることができる。このような大規模国際スポーツ大会の開催が続く状況に鑑み、間野は「地方を含め、日本が直面している課題を解決する千載一遇のチャンスだ」と語り、令和元年から令和3年までの3年間で「ゴールデン・スポーツイヤーズ」¹⁾と名付けた。その一方で各大会について「税金の無駄遣い」「開催地の負担が大きい」「スポーツに関心がない」等の反対の声もある。本間らは、「スポーツイベントにおける意見は、大会の規模が大きくなるに従い、ヒト・モノ・カネの流通が盛んになり、地域のインフラや経済効果等にも議論が及んでいく」と述べている。また、「スポーツイベントによる様々な影響が価値として肯定的に捉えられるためには、個人が心理的にスポーツに興味を持ち、有益な価値があると認識することが重要である」²⁾とも述べている。スポーツイベントが価値あるものと認識をする年齢が若ければ若いほど、将来のスポーツの普及・発展に大きく影響することが考えられる。東京2020大会等でも使用される「スポーツは世界を変える力がある」というネルソン・マンデラ氏の言葉を児童生徒が実感し、スポーツ基本法及びスポーツ基本計画で明記されている世界共通の文化として、国境や人種、性別、障がいの有無といった壁を越えて人々をつなぐことができるスポーツの価値を理解し、生涯を通じてスポーツに関わることができれば、その人のスポーツライフはより豊かになると考える。

ゴールデン・スポーツイヤーズとなる1年目はRWC2019が国内12の会場で開催された。公認キャンプ地は61の自治体に及んだ。RWC2019組織委員会は、「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」というキャッチコピーを謳い、大会を盛り上げるパブリックリレーション（PR）を開催地及び公認キャンプ地と共に積極的に展開してきた。福岡県では東平尾公園博多の森球技場を試合会場として、3試合が行われた。RWC2019の成功に向けて設立されたRWC2019福岡開催推進委員会事務局は、福岡で開催される3試合のうち2試合において、小学5年生から高校3年生までの児童生徒を試合会場に観戦招待した。ワールドカップという世界レベルの試合を児童生徒が試合会場で直接観戦することは、福岡県スポーツ推進計画（平成30年12月）に示されている「スポーツの力で県民生活をより豊かに、福岡県をより元気にするスポーツ立県福岡」³⁾の実現に寄与するものと思われる【図1】。さらに、県民の運動・スポーツに関する調査報告書（平成30年4月）によれば、「大規模国際スポーツ大会に期待すること」で最も高い値を示した内容は「子どもたちがスポーツの夢や目標を持つきっかけとなること」⁴⁾であったp. 2【図2】。RWC2019の観戦招待に参加する児童生徒の意識の変容について調査・分析することは、大会の成果を得ることに留まらず、今後のスポーツの更なる普及と発展のためには重要であると考えられる。

そこで、本調査研究活動を通して、RWC2019の福岡会場観戦招待事業に参加する児童生徒の意識の変容を明らかにしたい。



【図1 スポーツ立県福岡の好循環】

福岡県スポーツ推進計画より

2 社会の要請・教育の動向から

第2期スポーツ基本計画では、従来よりも「多様なスポーツの楽しみ方を共有すること」が強調され、学習指導要領では運動やスポーツとの関わり方に「知る」喜びが新たに加えられた⁵⁾。本年度から先行実施、令和4年度から年次進行で実施される高等学校学習指導要領（平成30年告示）解説保健体育編・体育編には、改善の具体的事項に「生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続して実践することができるよう（中略）内容等の改善を図る。」と示され、東京2020大会等がもたらす成果を次世代に引き継いでいく観点から、スポーツの意義や価値等の理解につながる指導等の改善が求められている⁶⁾。

また、「日常的にスポーツに親しみ、スポーツを楽しみ、スポーツを支え、スポーツを育てる活動に参画する機会が確保され、スポーツを実際に『する人』だけではなく、トップレベルの競技大会やプロスポーツの観戦などのスポーツを『観る人』、そして指導者やスポーツボランティアといったスポーツを『支える人』に着目し、人々が生涯にわたってスポーツに親しむことができる環境を整備する」⁷⁾というスポーツ立国の目指す姿が、RWC2019や東京2020大会等をきっかけにさらに進んでいくであろう。

そこで、本研究において、RWC2019の福岡会場観戦招待事業に参加する児童生徒の意識の変容の中でも、運動やスポーツを「する」「みる」「支える」「知る」ことに着目し、どのように変容するのかを明らかにしたいと考えた。

3 調査研究の必要性から

福岡県では、県民のスポーツの実態及びスポーツ振興に係る県民のニーズを把握するために、県内居住の18歳以上を中心とした「県民の運動・スポーツに関する調査報告書」が作成されている。また、児童生徒の運動・スポーツの実態については、「福岡県児童生徒体力・運動能力調査結果報告書」⁸⁾において、毎年調査・報告されている。これらの同様の調査は他県でも実施されており、運動やスポーツに関する実態を把握する調査活動は、現状の課題や今後の改善策を見出すためにも必要不可欠であるといえる。さらに、今年に限っては、RWC2019が福岡県でも開催される事情を踏まえ、体力・運動能力に係る調査項目のみならず、大規模国際スポーツ大会を契機とした運動やスポーツに関連する意識の変容を調査する必要性を強く感じている。なぜなら、児童生徒の意識の変容を把握・理解する調査活動は、来年度以降の大規模国際スポーツ大会等で期待される児童生徒への効果を事前に認識できるものであると考えるからである。また、RWC2019大会キャッチコピーのように「一生に一度」の貴重な機会となり、今年度にしかなできない調査研究となるはずである。

以上のことから、RWC2019の福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒にアンケート調査を実施し、意識の変容を調査・分析することは、RWC2019を福岡に誘致した成果の一つとして示すことができる。また、児童生徒に調査をすることは、将来の本県における人々の豊かなスポーツライフの実現を目指す上で、重要な示唆をもたらし得るものと思われる。

	サ ン プ ル 数	目 標 を 持 つ こ と	観 戦 し た り 交 流 し た り 競 技 を 間 近 と で	活 動 が 盛 ん に な る こ と と し て 、 ス ポ ー ツ	な ス ポ ー ツ の 振 興 等 、 多 元 的	経 済 活 性 化 を 促 し 、 地 域 の
今回全体	3224	61.2	57.4	37.8	22.4	18.1
性別						
男性	1472	59.1	53.4	42.9	25.3	20.8
女性	1747	63.2	60.7	33.6	20.1	15.9
運動の実施状況						
何らかの運動やスポーツを行った	2605	60.9	58.9	38.8	22.9	18.2
運動やスポーツはしなかった	527	62.3	50.4	33.1	20.0	17.6
わからない	7	85.0	41.2	43.8	26.2	15.0

(%)

【図2 大規模国際スポーツ大会に期待すること】
県民の運動・スポーツに関する調査報告書より

Ⅱ 主題・副主題について

1 主題の意味

(1) 「ラグビーワールドカップ2019」とは

4年に一度、100ヶ国程度の国と地域が参加して世界一を決めるラグビーの国際大会であり、2019年に日本で開催される大会のことである。

スポーツ庁は、「RWCは、入場者数などで、サッカーW杯、夏季五輪に次ぐ世界で3番目に大きなスポーツイベント」⁹⁾であると伝えている。前回のRWC2015（ロンドン大会）では、約247万人がスタジアムを訪れ、テレビ視聴が、世界の7億8千万世帯、40億人であったという調査結果（Ernst & Young）もある¹⁰⁾。今大会は、アジアで初めて開催され、公式キャッチコピーは「4年に一度じゃない。一生に一度だ。」として、開催国の意気込みも強く窺えた。

(2) 「ラグビーワールドカップ2019における児童生徒の意識の変容」とは

児童生徒がそれぞれ持っている運動やスポーツなどに対する考え方や捉え方が、RWC2019の試合を直接観戦することで変わることである。

本研究では、RWC2019の試合を、会場へ足を運んで直接観戦したことが、児童生徒の運動やスポーツに対する意識にどのような変容をもたらしたかを明らかにする。そのことにより、地元にスポーツイベントを誘致して直接観戦することが、児童生徒にどのような影響を与えたのかを示すことになる考える。

2 副主題の意味

(1) 「福岡会場観戦招待事業」とは

本研究では、RWC2019福岡会場における令和元年9月26日（木）イタリア対カナダ戦と10月2日（水）フランス対アメリカ戦の2試合において、RWC2019福岡開催推進委員会事務局が主催している「RWC2019福岡会場観戦招待事業」のことである。

(2) 「福岡会場観戦招待事業前後のアンケート調査」とは

福岡会場観戦招待事業に参加する児童生徒とその保護者、学校代表者に、本研究で設定する仮説を実証するための質問紙を大会の前後でそれぞれ配付し、その結果を集約・分析することである。

調査対象を福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒とその保護者、学校代表者とする。調査時期は、各学校ごとにRWC2019が開幕する前の約3週間と、RWC2019が閉幕した後の約3週間にそれぞれ実施する。さらに、事後アンケートの時期には比較対象群として、当該校の福岡会場観戦招待事業に参加していない同年代の児童生徒にも可能な限りアンケート調査を実施する。

Ⅲ 研究の目的・目標

1 研究の目的

調査活動を通じ得られる実態や内容を基に、本県における大規模国際スポーツ大会を誘致・開催した成果を明らかにし、本県の運動やスポーツの更なる普及と発展につなげる。

2 研究の目標

福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒とその保護者、学校代表者にアンケート調査を実施し、大会前後での児童生徒の運動やスポーツとの多様な関わり方や意識の変容を究明する。

IV 研究の具体的方法

1 仮説の設定

本調査研究を進めるにあたり、【仮説1-6】を設定した。

【仮説1】RWC2019の試合を直接観戦した児童生徒の運動やスポーツを「する」ことに関する意識が高まる。

【仮説2】RWC2019の試合を直接観戦した児童生徒の運動やスポーツを「みる」ことに関する意識が高まる。

【仮説3】RWC2019の試合を直接観戦した児童生徒の運動やスポーツを「支える」ことに関する意識が高まる。

【仮説4】RWC2019の試合を直接観戦した児童生徒の運動やスポーツを「知る」ことに関する意識が高まる。

【仮説5】ラグビーとの関わりが強い児童生徒ほど、RWC2019の試合を直接観戦した後の学校生活や学習に対する意識が高まる。

【仮説6】事前学習の機会が多い学校の児童生徒ほど、福岡会場観戦招待事業への期待感と満足感が高まり、運動やスポーツに関する各種意識も向上する。

以上の【仮説1-5】を設定するに至った先行研究の知見を紹介する。

大規模国際スポーツ大会であるアジア競技大会が1994年に広島で開催されている。この大会前後に地元市民を対象とした意識の調査研究「国際スポーツイベントの波及効果に関する社会学的研究」等を実施した谷口らは、次のようなことを示している。大会によって地域のアイデンティティが高まったこと、スポーツイベントが市民のスポーツの理解を深める契機として機能したこと、「国内でのスポーツ施設や環境が整っていない」といった社会システムに関する関心が寄せられるようになったこと等である^{11) 12)}。また、当該研究においては、「スポーツの更なる普及と発展が必要である」という市民の意識の高まりが確認されている。こうした研究報告は、その他の国際的なスポーツイベント実施時に行われた研究においても示されており^{13) 14)}、その対象は、20歳以上の成人がほとんどである。

なお、国民体育大会がもたらす教育的効果について「国民体育大会が青少年に与える教育的効果に関する調査研究」等を実施した神野らは、次のようなことを示している。式典への参加、ボランティア活動への従事等、国体への関与が緊密であった生徒においては、「運動・スポーツに対する関心度」「学校生活に対する満足度」が上昇傾向にあったこと¹⁵⁾、さらには、当該の生徒における「社会性」が向上傾向となったこと等である¹⁶⁾。

こうした先行研究に鑑みたとき、規模の大小を問わず、スポーツイベントの開催は、地元住民に対して各種の影響をもたらすことを認識するに至る。【仮説1-5】を支持する結果を得られれば、本県における大規模国際スポーツ大会を誘致・開催する成果という目的を達成できると考える。

また、福岡会場観戦招待事業に参加する前には、当該学校全てで事前学習を行うことが予定されている。時間や内容は各学校で実態に応じて取り組まれるため、事前学習による効果の現れ方に差が出るのではないかと考え【仮説6】を設定した。【仮説6】を支持する結果を得られれば、本県におけるスポーツの更なる普及と発展を目指す上で、学校での教育活動の必要性とその実例を示すことにつながると考える。

さらに、分析を行う際には、最初にRWC2019と福岡会場観戦招待事業に対する事前の期待感と事後の満足感の差を明らかにし、ラグビーへの関心がどのように変化したかを述べる。その結果を踏まえ、【仮説1-6】の検証と考察を述べていくことで研究の目的と目標を達成していきたい。

2 アンケート調査の概要

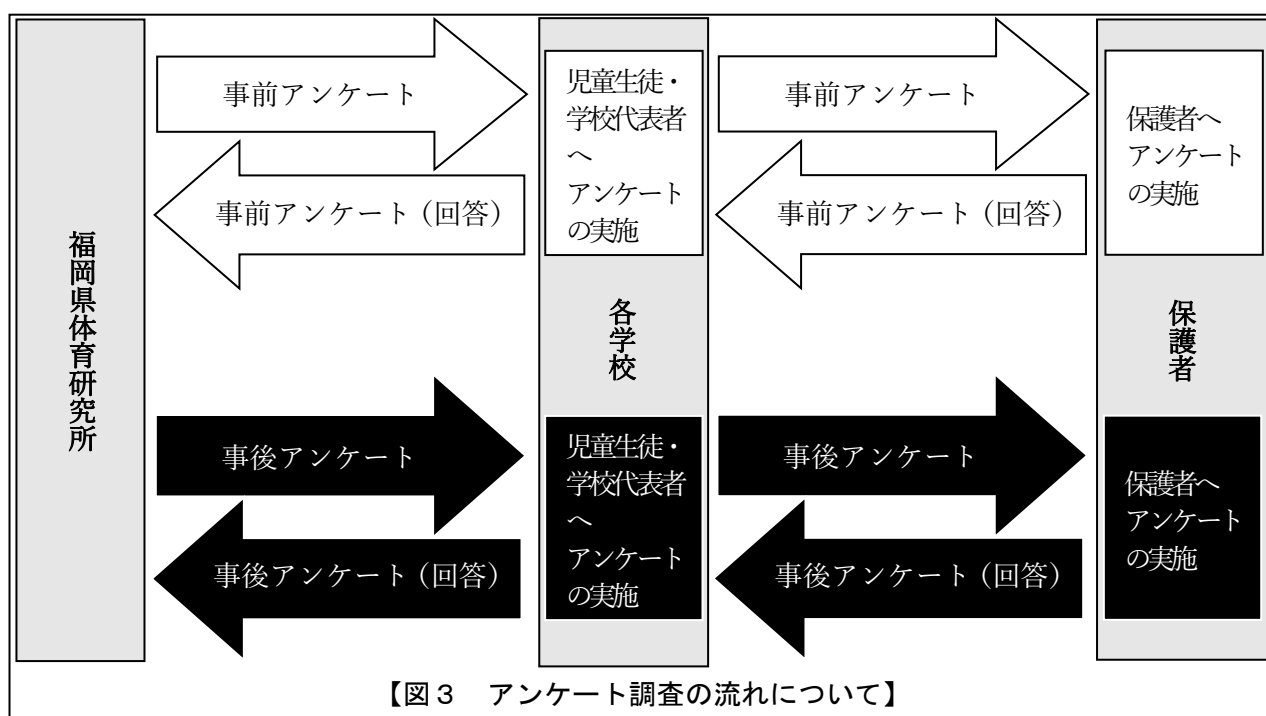
調査対象：①「福岡会場観戦招待事業」に参加した児童生徒とその保護者
 ②「福岡会場観戦招待事業」に参加した学校代表者
 ③「福岡会場観戦招待事業」における当日不参加の児童生徒（事後アンケートのみ）

調査時期：事前アンケート 令和元年9月2日から9月20日（9月20日RWC開幕）
 事後アンケート 令和元年11月5日から11月22日（11月2日RWC閉幕）
 （観戦する福岡会場での試合：9／26、10／2）

調査方法：質問紙による託送調査※

※託送調査とは、既存の組織や集団を利用して調査票を配付し、回収する方法である。

アンケートにおける各質問については、小学校5年生から高等学校3年生までに理解してもらえるように、中学生が理解できる内容をベースとして、小学校のアンケートには単語の説明を加えたり、ルビを打ったりした。また、保護者と学校代表者のアンケートについては、児童生徒と同じ質問をそれぞれの立場から見てどう感じているかを問うようにした。作成したアンケートは各学校へ送り、学校からの返信はレターパックを用いた【図3】。



3 観戦招待者数

校 種	学校数	招待者数		
		児童生徒数	引率者数	合計
小学校	10 校	810 人	78 人	888 人
中学校	8 校	1,076 人	101 人	1,177 人
高等学校	7 校	805 人	59 人	864 人
合計	25 校	2,691 人	238 人	2,929 人

※ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会事務局より

V 研究の実際

1 アンケートについて

(1) アンケートの質問数

アンケートの質問は事前と事後でそれぞれ以下のように設定した【表1】。なお、質問内容については、分析結果を示した図の上部に示している。

【表1 アンケートの内容】

		3 択マーク	4 択マーク	5 択マーク	自由記述
児童 生徒	事前アンケート	3 問	49 問		3 問
	事後アンケート	3 問	49 問		3 問
	不参加者へのアンケート※	3 問	47 問		1 問
保護者	事前アンケート		34 問		4 問
	事後アンケート		35 問		6 問
学校代表者	事前アンケート		32 問	1 問	3 問
	事後アンケート		32 問	1 問	5 問

※不参加者へのアンケートとは、福岡会場観戦招待事業の参加校の中で、当日参加していない同年代の児童生徒に事後アンケートと同時期に実施したアンケートのことである。

(2) アンケートの回収結果

アンケートは事前と事後でそれぞれ以下のように回収した【表2】【表3】。

【表2 事前アンケートの回収数】

	学校数	有効回収数／ 当日参加の児童生徒数 (回収率)	学校 代表者数 (回収率)	有効回収数／当日参加 の児童生徒の保護者数 (回収率)
小学校	10 校	719／768 人 (93.6%)	8 人 (80.0%)	613／768 人 (79.8%)
中学校	8 校	985／1,015 人 (97.0%)	7 人 (87.5%)	624／1,015 人 (61.5%)
高校	7 校	721／753 人 (95.8%)	5 人 (71.4%)	489／753 人 (64.9%)
合計	25 校	2,425／2,536 人 (95.6%)	20 人 (80.0%)	1,726／2,536 人 (68.1%)

【表3 事後アンケートの回収数】

	学校数	有効回収数／ 当日参加の児童生徒数 (回収率)	学校 代表者数 (回収率)	有効回収数／当日参加 の児童生徒の保護者数 (回収率)	学校数・不参加の児童 生徒数／当日参加の 児童生徒数 (割合)
小学校	10 校	683／768 人 (88.9%)	10 人 (100.0%)	537／768 人 (69.9%)	5 校・195／768 人 (25.4%)
中学校	8 校	946／1,015 人 (93.2%)	8 人 (100.0%)	500／1,015 人 (49.3%)	3 校・89／1,015 人 (8.8%)
高校	7 校	662／753 人 (87.9%)	7 人 (100.0%)	369／753 人 (49.0%)	6 校・564／753 人 (74.9%)
合計	25 校	2,291／2,536 人 (90.3%)	25 人 (100.0%)	1,406／2,536 人 (55.4%)	14 校・848／2,536 人 (33.4%)

【表 3】では、福岡会場観戦招待事業の参加校の中で、参加していない同年代の児童生徒に実施したアンケートの回収数を含めて示した。実施の時期は事後アンケートと同時期である。本研究では、福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の RWC2019 前後における意識の変容を究明することが目標となっているが、福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒と不参加だった児童生徒の意識の差についても比較対象として調査することが可能であると考えた。不参加の児童生徒のアンケート回収数については、比較対象の資料として有効だと判断される 2 割（参加者の児童生徒に対する割合）の数を目標として各学校に依頼した。

実際の回収数（当日参加の児童生徒数に対する割合）は、小学校が 195 人（25.4%）、中学校が 89 人（8.8%）、高等学校が 564 人（74.9%）となり、合わせて 848 人（33.4%）であった。小学校・高等学校で有効回答数は確保できたが、中学校では、参加校 8 校のうち 3 校が全校生徒で参加していたため、十分な回答数が得られなかった。

(3) アンケートの集約

アンケートの集約は、以下の手順によって行った。

手順 1：回収したアンケートの回答をスキャンしてデータ化（PDF 形式）する。

手順 2：PDF 形式のデータをソフトウェア^①によって JPEG 形式に変換する。

手順 3：手順 2 のデータをソフトウェア^①で読み込み Excel 形式にデータ処理する。

手順 4：手順 3 のデータと実際の回答用紙を照らし合わせ、手順 3 の読取処理にミスがないか確認し、必要に応じて修正を行う。

2 アンケートの分析と結果の判断

アンケートの分析については、事前アンケートと事後アンケートでの回答差を統計的に検討し、ピアソン（Pearson）のカイ 2 乗検定を用いて有意差検定を行った。ピアソンのカイ 2 乗検定とは、アンケート調査をはじめとしたデータ間の差異を統計的に判定する方法であり、P 値（P-value）が 0.05 未満の場合に「統計的有意差がある」と判断されている。なお、ピアソンのカイ 2 乗検定を用いた先行研究においては、0.05（5%）を有意差の基準とし、0.01（1%）、0.001（0.1%）という P 値が用いられることが多く、数値が小さいほど「統計的有意差は顕著な傾向にある」との見解が示されている。そこで本研究では、有意水準を 0.001（0.1%）と 0.01（1%）、0.05（5%）の 3 つに設定し、有意差が確認できた場合、各分析の結果を水準の高い順に「 $p<.001$ 」「 $p<.01$ 」「 $p<.05$ 」と図中に表記した。なお、有意差が確認されない場合には「n.s.」（not significant）とした。

また、有効回答とした度数（n）については、事前事後間で整合されていない箇所が存在する。これは、質問紙の回収数と、マークミスや回答なし・把握できない記録等が顕著である欠損回答を除外したために生じている。事前アンケートと事後アンケートの回収数にも差があるが、母数が 2000 を超えていることや回収率が 50%を超えているために統計的な値として有効であると評価された。

仮説を支持するか棄却するか判断については、以下のように基準を設けた【表 4】。

【表 4 仮説を支持するか棄却するかの基準】

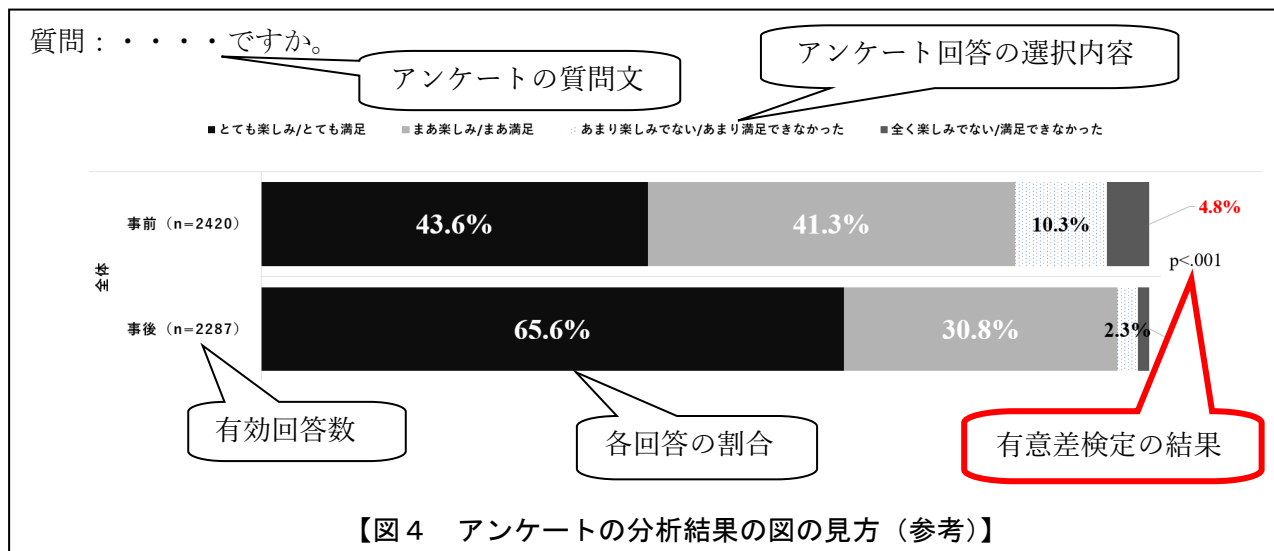
基 準	判断
仮説のような数値の増加があり、全体の結果、または 2 校種以上が有意差を示す。	支持
仮説のような数値の増加があるが、有意差なし（n.s.）、または 1 校種のみが有意差を示すだけである。	一部で支持
仮説のような数値の増加がない、または全体の結果が有意差なし（n.s.）となる。	棄却

【表 4】の基準によって各データを確認していく。複数の質問項目がある場合は半数以上が支持された場合に仮説を一部で支持することとする。半数未満の場合は仮説を棄却する。

なお、本研究におけるアンケートの分析では、分析専用のソフトウェア^②を用いて実施した。

VI 結果と考察

結果と考察については、アンケートの分析結果や自由記述から検証結果をまとめ、仮説に対する考察を述べる構成とする。また、p. 4で前述しているが、分析の初めに「ラグビーへの関心の変化」を設定した。ラグビーへの関心については仮説を設定していないものの、本研究の題材とするラグビーに関する RWC2019 と福岡会場観戦招待事業の評価は必要であると判断した。分析結果は全て同じ形式を図で示し、図の見方について参考を【図 4】に示す。



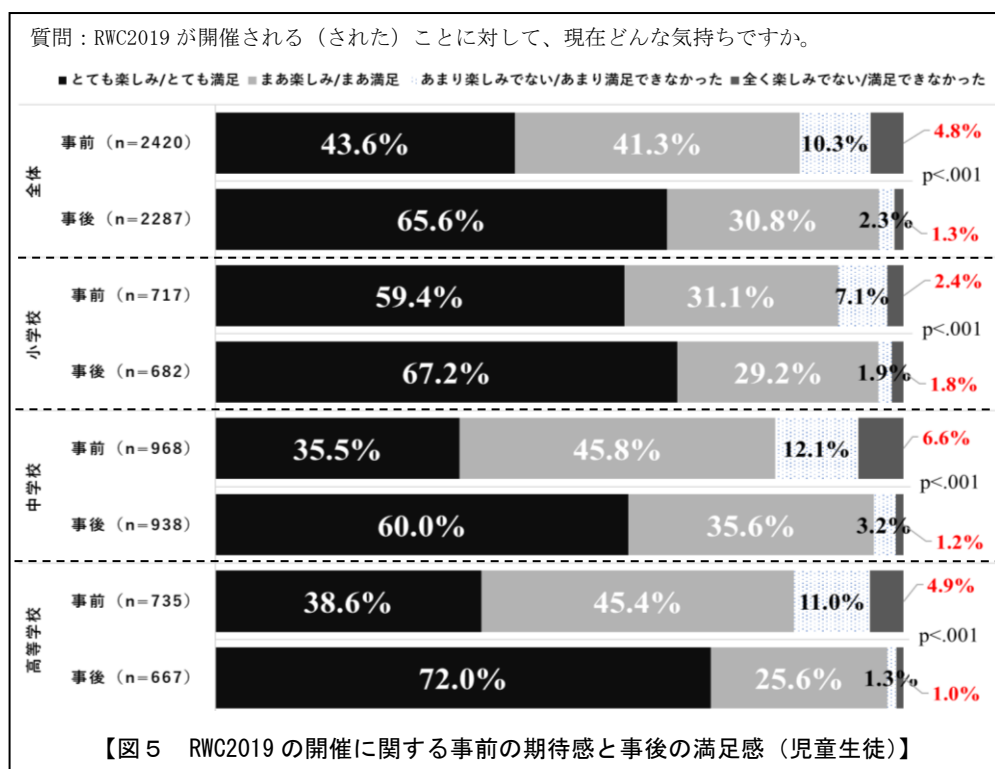
※グラフの割合（％）は、小数点第2位を四捨五入して示したため、合計が100％にならない箇所が存在する。

1 ラグビーへの関心の変化

まず、本研究の題材としているラグビーへの関心として、RWC2019 と福岡会場観戦招待事業の評価（事前の期待感と事後の満足感）の結果を示し、考察する。

(1) RWC2019 の期待感と満足感

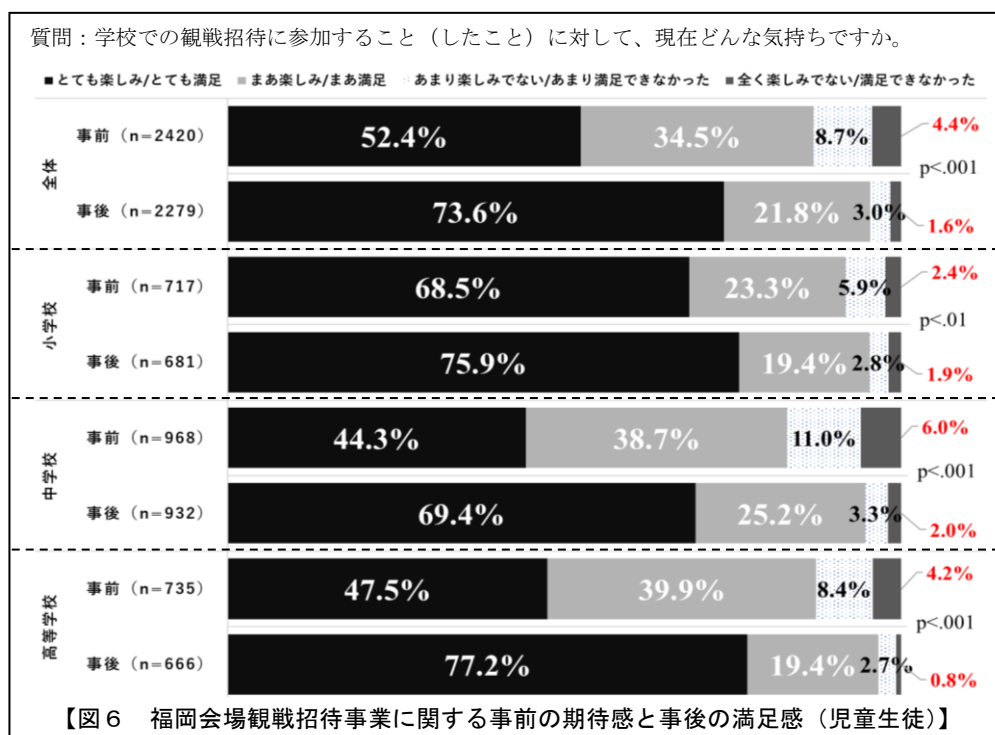
RWC2019 開催の評価（事前の期待感と事後の満足感）について、結果を【図 5】に示す。



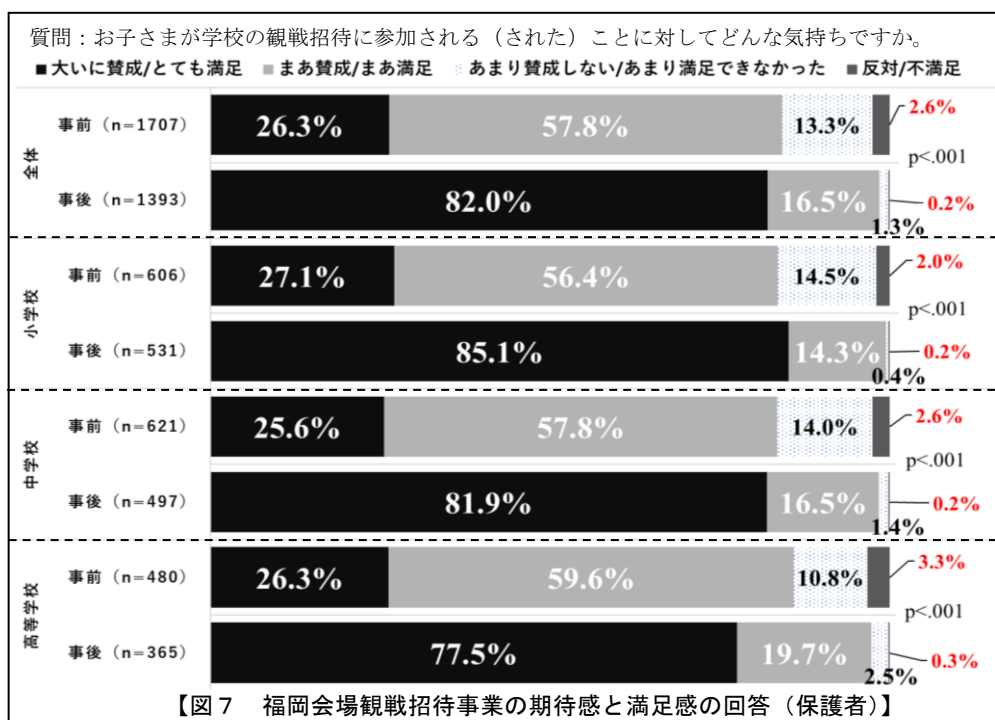
【図 5】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できた ($p<.001$)。全体において、事前の期待感「とても楽しみである」が 43.6%であったのに対し、事後の満足感「とても満足した」が 65.6%と事前事後間で 22.0 ポイント増加した。この事前事後間の数値の変化は、全校種で確認された。

(2) 福岡会場観戦招待事業の期待感と満足感

福岡会場観戦招待事業の評価（事前の期待感と事後の満足感）について、結果を【図6】に示す。



【図6】から、全体及び中学校・高等学校に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。小学校でも有意差が確認できた(p<.01)。全体において、事前の期待感「とても楽しみである」が52.4%であったのに対し、事後の満足感「とても満足した」が73.6%と事前事後間で21.2ポイント増加した。小学校では、他校種よりも有意水準が低かったため、保護者アンケートの結果を【図7】に示す。



【図7】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。全体において、事前の「大いに賛成」が26.3%であったのに対し、事後の「とても満足した」が82.0%と事前事後間で55.7ポイント増加した。

考察：ラグビーへの関心の変化について (p. 8 - 9)

まず、本研究の題材である RWC2019 への児童生徒とその保護者の評価について結果を示した。p. 8

【図 5】から全校種において、事前の期待感を示す数値よりも事後の満足感を示す数値の方が高くなり、有意差も確認できた。また、p. 9【図 6】【図 7】から福岡会場観戦招待事業の評価についても RWC2019 の評価と同様の結果となった。このことから RWC2019 と福岡会場観戦招待事業に期待感をあまり抱いていなかった児童生徒とその保護者が、大会後に満足感を抱いたと考える。ラグビーへの関心の高まりが確認できたことから、以降の分析結果についてもおおむね満足できるものになると期待できる。

p. 9【図 6】の小学校の有意水準が他校種よりも低かった要因については、事前の期待感を示す「とても楽しみ」の回答が 68.5% と高く、事後の満足感との差が他校種よりも小さかったことが考えられる。事前の期待感が高いことが分かる小学生の自由記述を【資料 1】に示す。

まだで見れるのがすごく楽しみ、

どんなすごいチームがくるのかを
期待している

こんなことめったにないので、とてもほこらしい
です。

【資料 1 福岡会場観戦招待事業に期待する内容（小学生）】

また、保護者の自由記述からも、期待感が高かった児童生徒の様子が窺える。「とても楽しみにしている。」(40 代・母親)「観戦する国の国歌を練習している。」(50 代・母親)「ラグビーのルールを調べている。」(30 代・母親)「少しずつラグビーをやってみたいと変わってきた。」(40 代・母親) 等である【資料 2】。

決まる前から、もしかしたら選ばれる
かもしれない。と、わくわくしてしま
したし、選ばれた時は、とても喜ん
んで、試合が来る日を楽しみに
しています。目の前で見れるのを
ワクワクしています。有りがとうございます。

一生に一度、福岡で見れるチャン
スに、学年全員で観戦出来ること。又、
本物のラグビーを見れることかとても
うれしく、楽しみにしている。

観戦に行く国の国歌を
練習したり、とても楽しみに
しています。

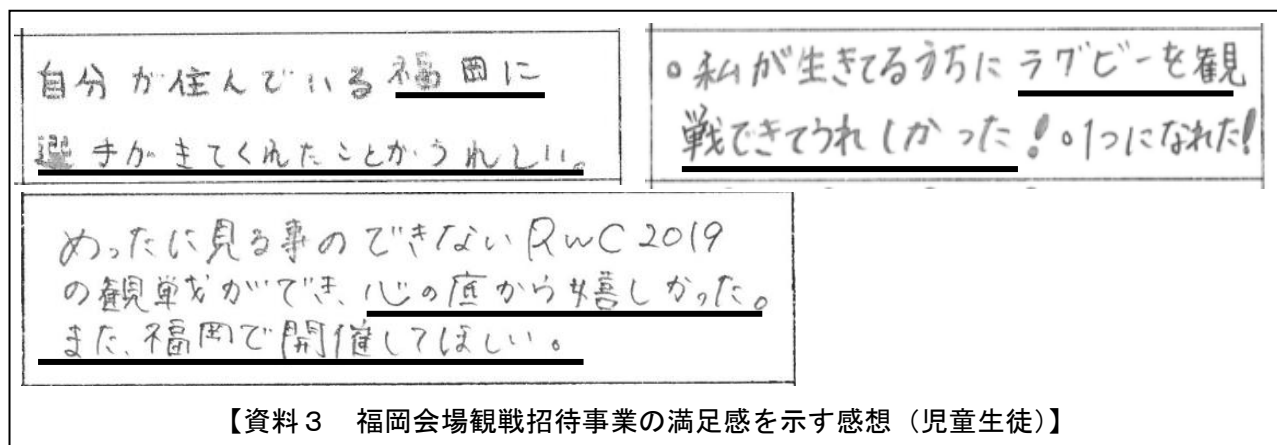
すごく喜んでいました。
ラグビーのルールを調べていました。

とても楽しみにしている様子。
TV など、ラグビーの話題が
あがると、観たり、調べたり
している。どうも観ている。

はじめは、だるい行きたくないと
言っていましたが、少しずつラグビー
をやってみたいに変わっています。
「フーサイド、ゲーム」のテレビも
効果的のようです。

【資料 2 期待感が高かったことが分かる児童の様子（小学校の保護者）】

さらに、児童生徒の事後アンケートで、福岡会場観戦招待事業に参加した後の満足感を示す感想の例として「福岡に選手が来てくれたことがうれしい。」(小学6年生・男子)「ラグビーを観戦できてうれしかった！」(中学1年生・女子)「心の底から嬉しかった。また福岡で開催してほしい。」(高校2年生・女子)等があった【資料3】。



【資料1】【資料2】【資料3】から、以降の分析においても、事前の数値が高いことが要因で、事後の数値との差が小さいために有意水準が下がったり、有意差が確認できなかったりすることが考えられる。

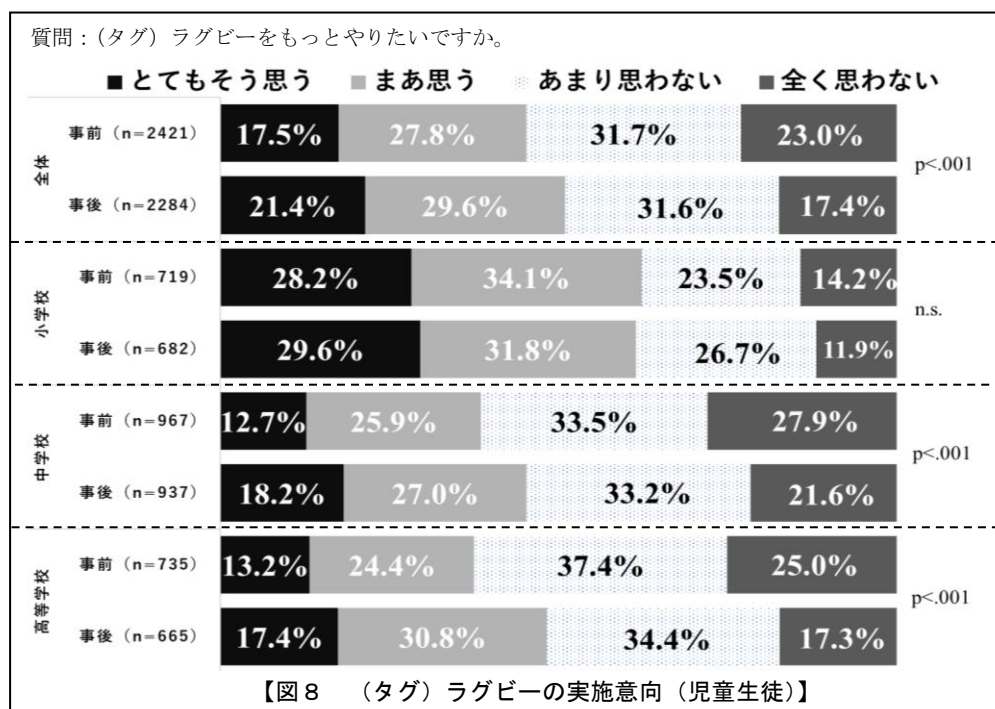
福岡会場観戦招待事業の影響について児童生徒の意識の変容を明らかにするためには、福岡会場観戦招待事業への参加が決定する前の児童生徒の意識についても調査することで、より詳細なデータが把握できたのではないかと考える。そのためには、事前アンケートを行う前に、プレアンケートのようなものを実施することができたならば、福岡会場観戦招待事業への参加が決定した時の気持ちの変化や当日までの事前学習によってどの程度意識の変容があったかについても把握することができたのではないかと考える。

2 【仮説1-4】の検証（運動やスポーツに関する各種意識の変容）

(1) 【仮説1】の検証（「する」意識の変容）

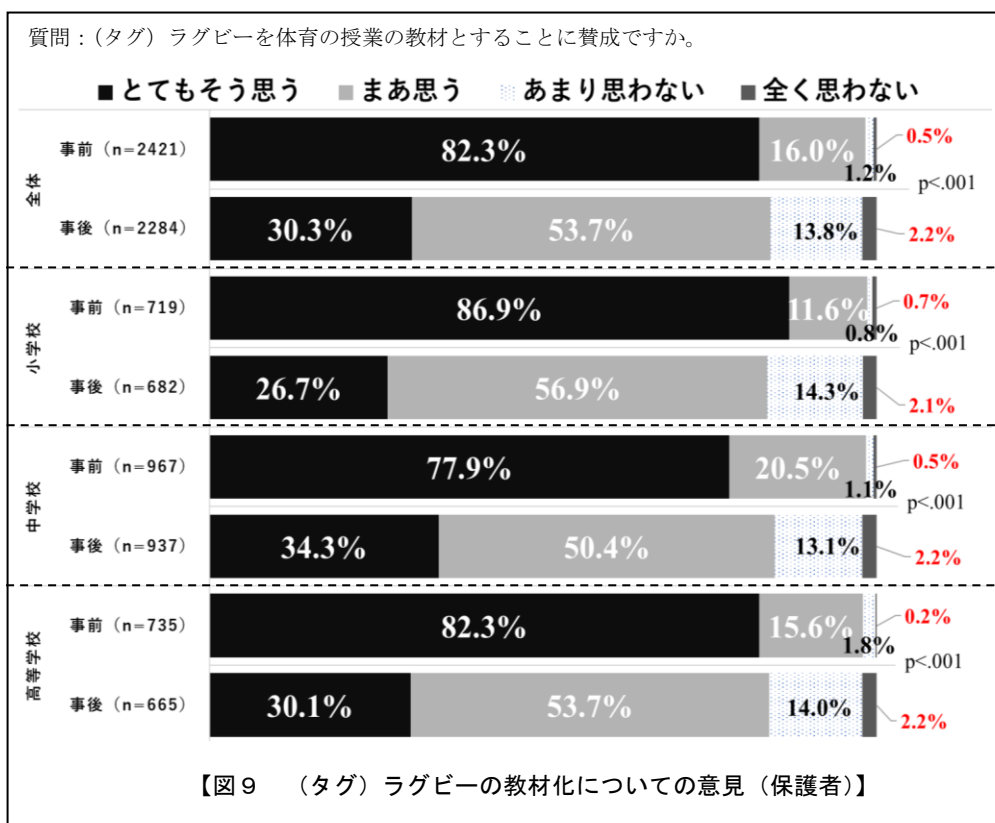
ア （タグ）ラグビーをやってみたいという実施意向

福岡会場観戦招待事業によって、各国代表レベルのラグビーのプレーを直接観戦したことで、児童生徒の（タグ）ラグビーをやってみたいという意識は高まるであろうと予想した。また、小学校学習指導要領解説体育編にタグラグビーが例示され、小学校第3学年及び第4学年のゴール型ゲームの内容に「タグラグビーやフラグフットボールを基にした易しいゲーム」が、第5学年及び第6学年のゴール型の内容に「タグラグビーやフラグフットボールを基にした簡易化されたゲーム」が記載されている。さらに、中学校学習指導要領解説保健体育編の球技の内容の取扱いにも「学校や地域の実態に応じて、タグラグビーなどの運動についても履修させることができる」と記載されている。そこで「（タグ）ラグビーをもっとやりたいですか」という質問を設定した。この回答による事前事後間の数値の変化を p.12 【図8】に示す。



を上回った。「とても思う」と「まあ思う」を合わせた割合の事前事後間では、5.7ポイント増加した。小学校では、有意差が確認できず、実施意向の変化も他校種とは違い、「とても思う」と「まあ思う」を合わせた回答が事後の方で少なくなった。

そこで、保護者に実施した「お子さまは(タグ) ラグビーをもっとやりたいと思っていますか」というアンケートについても同様の分析を行った。この結果、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。数値の変化についても増加傾向であった。さらに、保護者に(タグ) ラグビーを体育の授業で教材とすることについて質問した結果を【図9】に示す。



【図8】から、全体及び中学校・高等学校に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。一方、小学校では有意差を確認できなかった(n.s.)。

全体において、事前の実施意向は「とても思う」が17.5%、「まあ思う」が27.8%であり、合わせて45.3%と半数を下回っていたが、事後では「とても思う」が21.4%、「まあ思う」が29.6%であり、合わせて51.0%と半数

【図9】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。

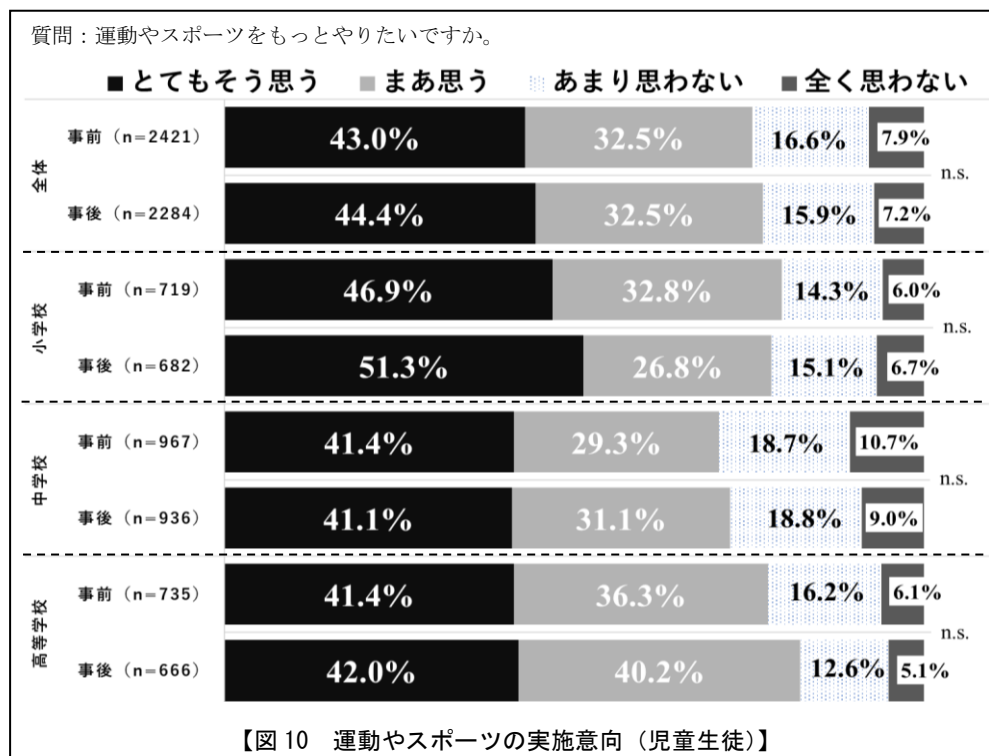
しかし、全体において、事前の賛成意見「とても思う」が82.3%であるのに対し、事後の賛成意見「とても思う」が30.3%と52.0ポイント減少している。この事前事後間の数値の変化は全校種で確認された。

つまり、保護者の(タグ) ラグビーを体育の授業で取り扱うことに賛成する意見は減少したといえる。

次に、ラグビーに限らず運動やスポーツに関する「する」意識について、結果を示していく。

イ 運動やスポーツの実施意向

運動やスポーツの実施意向について、結果を【図 10】に示す。

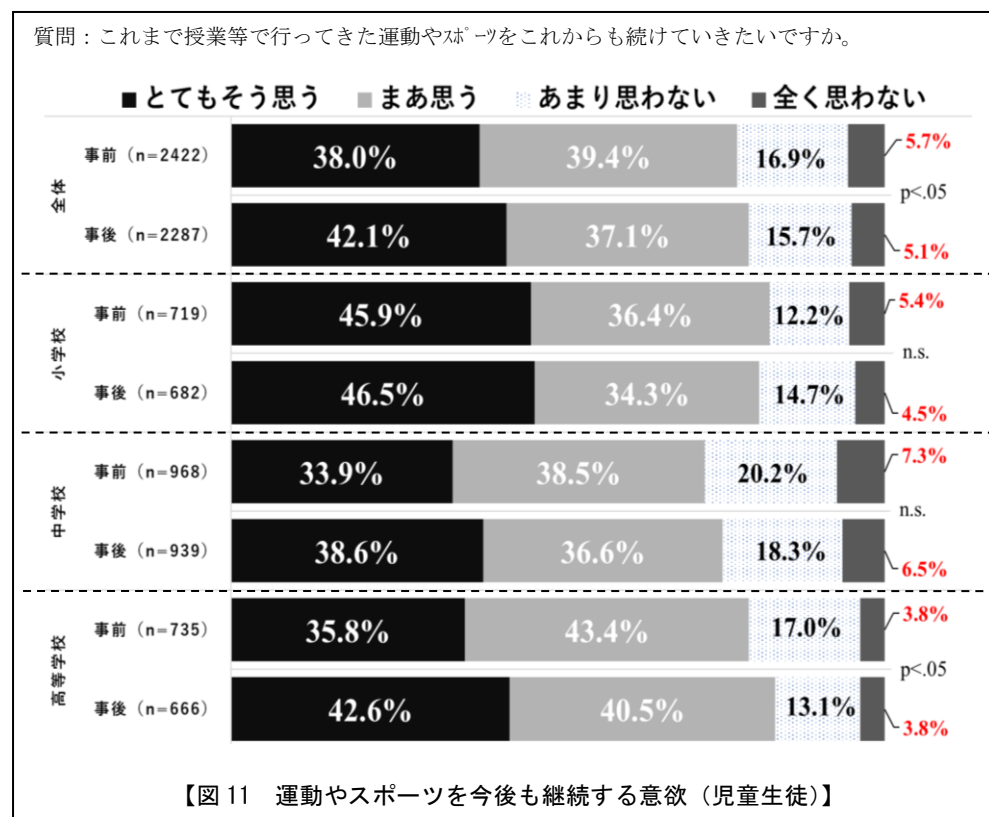


【図 10】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。

全体において、事前の「とてもそう思う」が 43.0%、「まあ思う」が 32.5%であり、合わせた 75.5%が運動やスポーツの実施意向を示した。事後の「とてもそう思う」が 44.4%、「まあ思う」が 32.5%であり、合わせた 76.9%が運動やスポーツの実施意向を示した。事前事後間で 1.4 ポイント増加した。

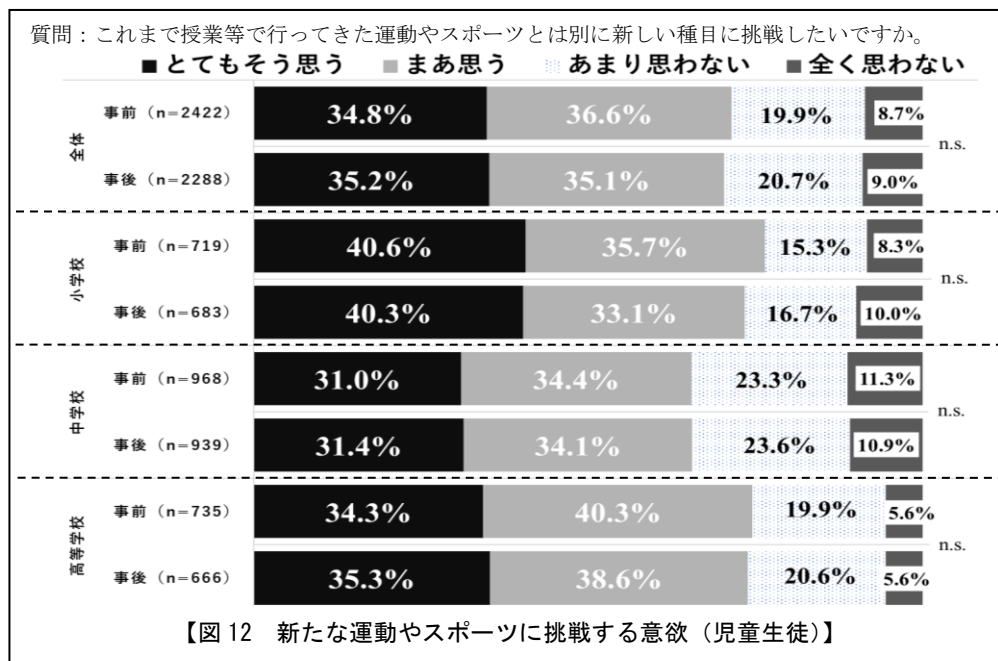
ウ 今後の実施意向

「イ 運動やスポーツの実施意向」では、アンケート実施時における児童生徒の意見を把握し、事前事後間で比較している。運動やスポーツの今後の実施意向については、継続して行う意欲と新たな種目に挑戦する意欲の 2 つに分けて、質問した結果をそれぞれ【図 11】と p. 14 【図 12】に示した。

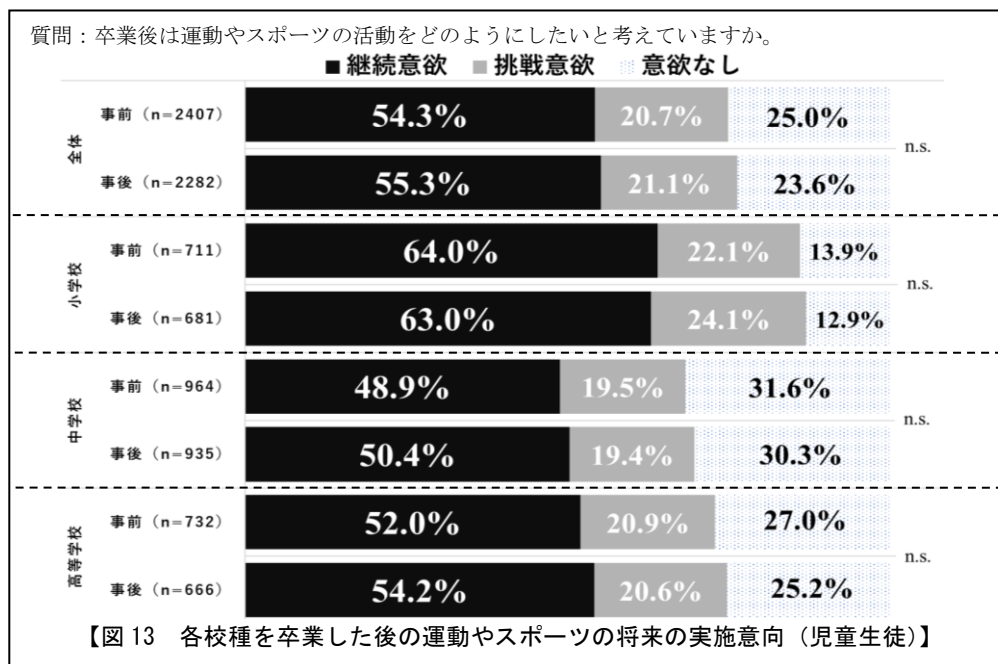


【図 11】から、全体と高等学校に事前事後間の有意差を確認できた(p<.05)。

高等学校では、「とてもそう思う」が事前で 35.8%、事後で 42.6%と事前事後間で 6.8 ポイント増加した。一方、小学校と中学校では有意差を確認できなかった(n.s.)。小学校では「とてもそう思う」と「まあ思う」を合わせた継続する意欲は 1.5 ポイント減少しているが、中学校では 2.8 ポイント増加している。



【図 12】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。そこで、各校種の卒業後に運動やスポーツをどのようにしたいかを質問し、回答を「継続する意欲」「挑戦する意欲」「意欲なし」の3つに分類した結果を【図 13】に示す。



【図 13】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。全体において、「継続意欲」と「挑戦意欲」を合わせた将来の実施意向は事前が 75.0%、事後が 76.4%であり、事前事後間で 1.4 ポイント増加している。

検証結果：【仮説 1】の検証（「する」意識の変容）

【仮説 1】（「する」意識の変容）は、会場で直接観戦することによって運動やスポーツを実施する意識が高まるとしていたが、p. 12【図 8】、p. 13【図 11】については支持、p. 13【図 10】、【図 13】については一部で支持された。

有意差が確認できなかったところがあったものの、数値の増加から運動やスポーツを「する」という意識に影響を与えていることが考えられる。

以上のことから、【仮説 1】は一部（高等学校）で支持された。

考察：【仮説 1】の検証（「する」意識の変容）について（p. 11 - 14）

【仮説 1】について、(タグ) ラグビーをやりたいという実施意向が中学校・高等学校で有意差を確認できた。運動やスポーツの実施意向については、高等学校で有意差を確認できた。また、全校種で運動やスポーツをやりたいと回答した数値は増加した。この要因として、全校種において、事前の

「とてもそう思う」と「まあ思う」の合わせた回答が7割を超える高い数値であったため、事後の数値の変化は全て高まっているものの、事前と事後の差が小さく、有意差が確認できなかったものが多かったのではないかと考える。【仮説1】については一部（高等学校）で支持された。

福岡会場観戦招待事業に対して、事前の賛成の理由と事後の満足感の回答理由について保護者の自由記述の一部には「普段遊ばない子と外でラグビーごっこで遊んでいる。」（40代・母親）「ラグビーに興味を持つようになり、身体を鍛えるよう毎日運動するようになった。」（20代・母親）「外でボールを使った遊びをするようになり、また一つ遊び方を学んだ。」（30代・母親）等、実際にラグビーを行うようになったり、ボールを使った外遊びをするようになったりといった行動の変容が窺える【資料4】。これは、福岡会場観戦招待事業によって運動やスポーツの実践（行動の変容）につながった成果の一つであると考えられる。他にも福岡会場観戦招待事業に参加させて良かった理由を記述していた内容が多数あったので紹介する。

ラグビーごっこで普段遊ばない子と外で遊んでいることは、RWCで特別な体験をさせて頂いたがうです。1人で好きな読書を楽しむ時間以上に楽しい時間になっていること、体を動かして遊ぶ楽しさを感じていて感謝しています。	ラグビーに興味を持つようになった 身体を鍛える毎日 自宅で運動するようになった
息子が、自分以外の事（ラグビー観戦）に集中して、声がかれるほど応援し、熱中できた事は、今までありません。すごい事だと思っています。	外でボールを使った遊びをするようになり、友達とまた一つ遊び方を学んだから
ワールドカップが自分の住む町で開催されて子供に世界一のプレーを見せてもらえて本当に光栄でした。	観戦で多くの子供の興奮が伝わってきて、とても楽しかったんだなと感じ、うらやまにも思った。 スポーツにもいろんな球技がある事におどろいていた。
・ラグビーの試合をテレビでみたり、するようになった。 ・期待以上のすばらしさを感じ、その本物の雰囲気と体験できたようで、様子をよく話していた。	今日、先生方が応募して頂き、こういう機会を頂いた事をとても感謝しています。どうしても親の興味がある事に連れて行きたいになるので、今日の様なラグビーに触れるチャンスも頂いた事がありがたいと思います。

【資料4 「学校でのRWC2019の観戦招待にお子さまが行くことに賛成ですか/参加させて満足ですか」の回答理由（保護者）】

以上のことから、福岡会場観戦招待を含めたRWC2019は児童生徒とその保護者の意識の変容から高い評価を得たと考える。福岡県スポーツ推進計画では、「今後も大規模国際スポーツ大会をはじめとするスポーツイベントを誘致し、開催すること」が示されているが、加えて、児童生徒にスポーツとの関わりを持たせる機会も必要であり意義があると考えられる。スポーツの大会が福岡で開催される際、児

童生徒が直接観戦したり、大会運営に携わったりできる機会を、今後も期待したい。

p. 12【図8】で小学校にのみ有意差を確認できなかった(n.s.)要因として、回答欄に「(タグ)ラグビー」と示したために、タックルありのラグビーとタックルなしのタグラグビーが混同し、タグラグビーを知らない人にとっては回答が難しいものであったのではないかと考える。その理由として、保護者の質問「(タグ)ラグビーを体育の授業の教材とすることに賛成ですか」の回答理由に「タグラグビーは知らない」という内容が一部あったことがあげられる【資料5】。

タグラグビー ほとんど知らないの、賛成も反対もわからない。

正確に言うと賛成でも反対でもありません。そもそも、タグラグビーも知らないの？...

【資料5 「タグラグビーは知らない」という内容(保護者)】

また、p. 12【図9】で保護者が、(タグ)ラグビーを体育の教材とすることへの賛成の意見が減った要因としては、RWC2019開催によってラグビーという種目の特性を理解した保護者が増えた結果、安全面等への不安が出てきたのではないかと考える。RWCというラグビーの激しさをTVやインターネットで直接見て理解したと推察される。賛成・反対それぞれの回答理由の一部を【資料6】に示す。

○賛成する意見

4-人の大切さやチームワークの精神を学ぶ機会であると思う。

自分が中学生の時もタグラグビーが体育の授業であり、楽しかった。

色々なスポーツにふれてほしいから。

●反対する意見

危険そうだから

ラグビーは体をぶつかり合わせるスポーツで、運動が苦手な子や慣れない子もいる中で、全員で行う体育の授業でとりあげるのには反対です。また指導する教員の中に得意な人の方が少ない中、扱うのは安全上問題があります。やりたい人が専門の方に教えてもらうことで十分だと思います。

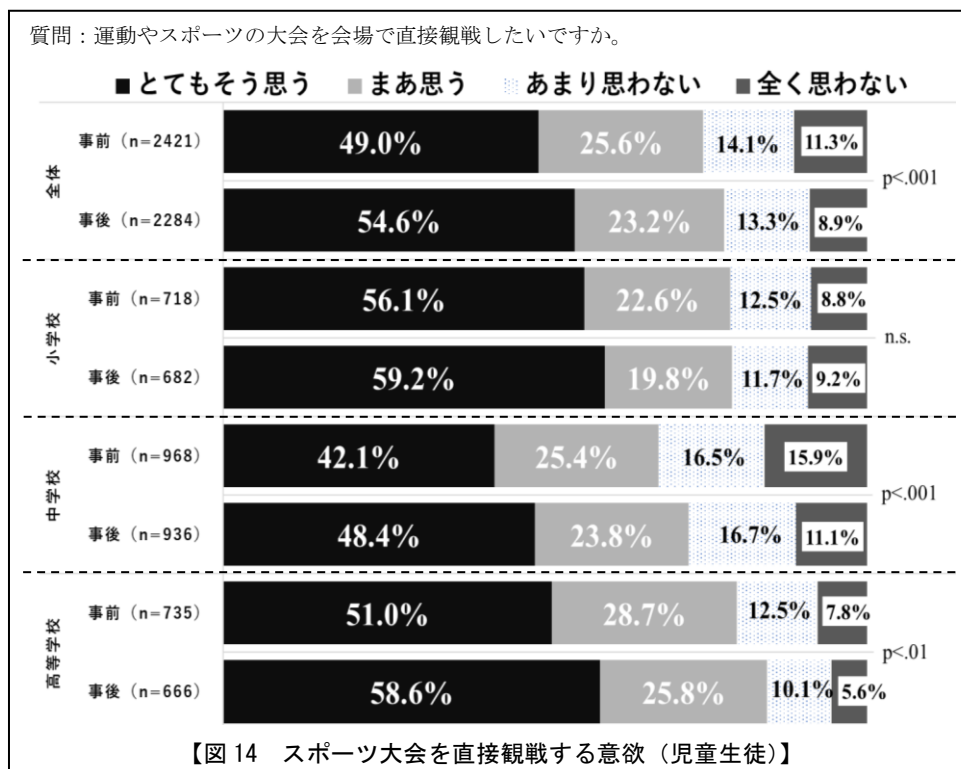
【資料6 「(タグ)ラグビーを学校の体育の授業で教材とすることに賛成ですか」の回答した理由(保護者)】

【資料5】、【資料6】の保護者の記述の内容から、今後の体育の授業における課題が見えてきた。体育の授業で行うことに賛成した多くの理由が「色々なスポーツを経験をさせたい」というものであった。一方で、反対意見の多くにケガの心配や安全面への不安が目立った。また、ラグビーを指導する教員の経験や専門性についても不安を感じている意見があった。

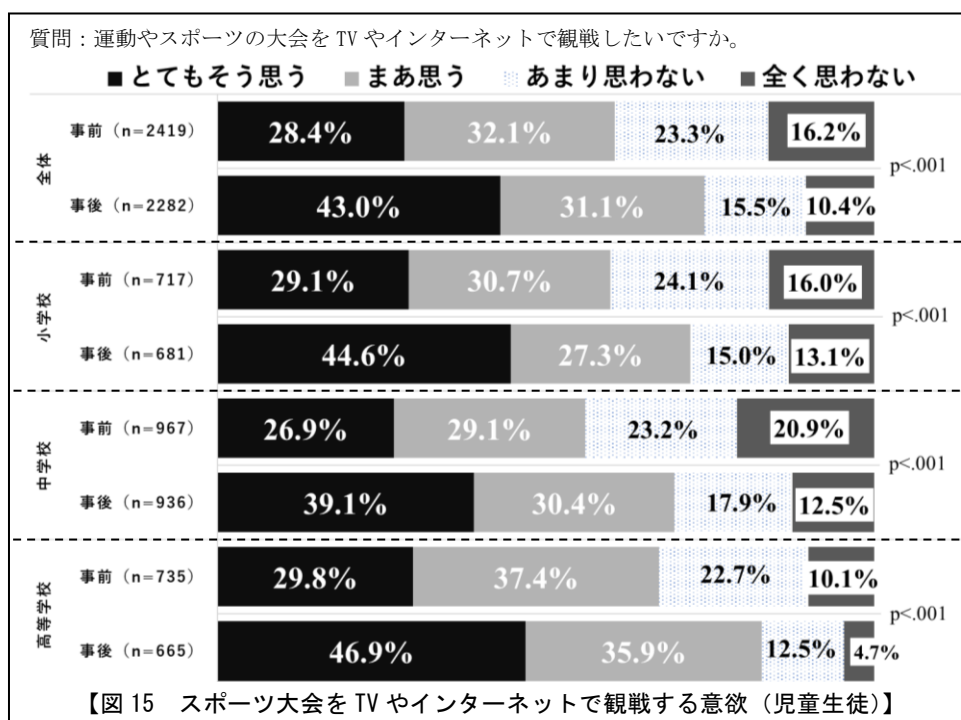
今年は、東京2020大会を中心に多くのスポーツ種目を目にする機会が増えることが予想される。体育の授業でも、取り扱う種目には、それぞれの種目の特性や身につける力等を学習指導要領から把握するだけでなく、安全面への配慮等にも気を配る必要がある。

(2) 【仮説 2】の検証（「みる」意識の変容）

運動やスポーツを「みる」方法について、本研究では、①会場で直接観戦すること、②パブリックビューイングで観戦すること、③TV やインターネットで観戦することの3つに分類した。さらに、④チームや選手を応援するという「見方」についても調査した。今回のアンケートでは、①③④の意識について質問した。各回答結果は、それぞれ【図 14】【図 15】 p. 18 【図 16】に示す。

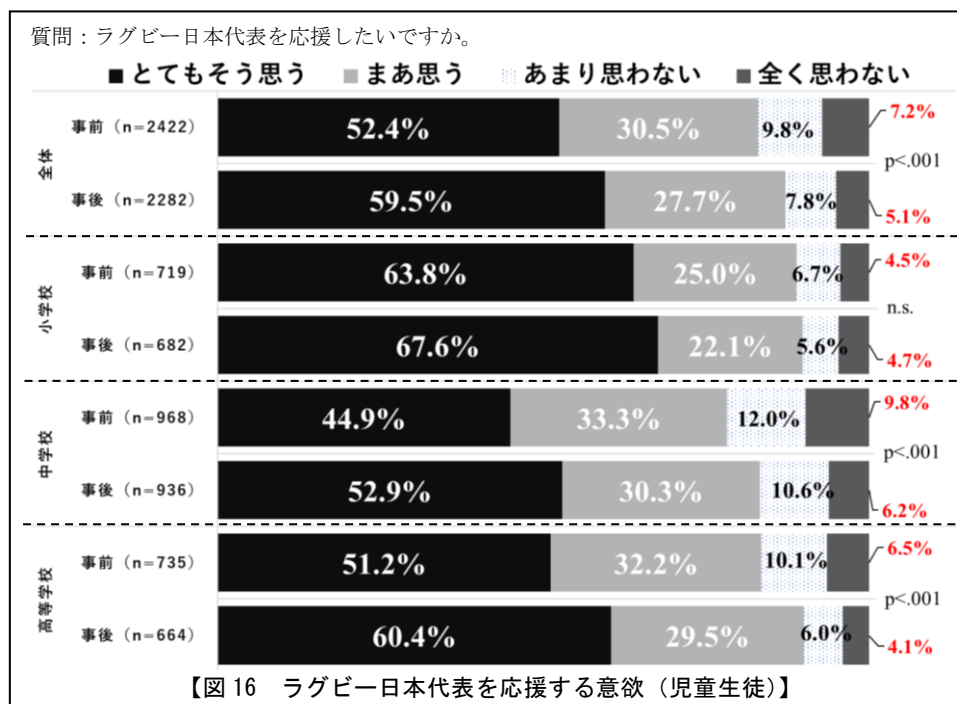


【図 14】から、小学校に事前事後間の有意差を確認できなかった (n.s.)。中学校は ($p<.001$)、高等学校は ($p<.01$) で全体で ($p<.001$) と有意差を確認できた。全体において、事前は「とてもそう思う」が 49.0%、「まあ思う」が 25.6%であり、合わせた 74.6%が会場で観戦したいと回答し、事後は「とてもそう思う」が 54.6%、「まあ思う」が 23.2%であり、合わせた 77.8%が会場で観戦したいと回答した。事前事後間で 3.2 ポイント増加した。



【図 15】から、全体及び全校種に事前事後間の有意差を確認できた ($p<.001$)。全体において、事前は「とてもそう思う」が 28.4%、「まあ思う」が 32.1%であり、合わせた 60.5%がTV やインターネットで観戦したいと回答し、事後は「とてもそう思う」が 43.0%、「まあ思う」が 31.1%であり、合わせた 74.1%がTV やインターネットで観戦したいと回答した。事前事後間で 13.6 ポイント増加した。

【図 14】【図 15】の結果から、全校種において運動やスポーツを会場で直接観戦することの意識の方が、TV やインターネットで観戦することの意識よりも高い割合を示していることが分かる。



【図 16】から、小学校に事前事後間の有意差を確認できなかった（n.s.）。全体及び中学校・高等学校は有意差を確認できた（p<.001）。全体において、事前の「とても思う」が 52.4%であったのに対し、事後の「とても思う」が 59.5%と事前事後間で 7.1 ポイント増加した。

さらに、①②③の実態を把握するために、福岡会場観戦招待事業を除く運動やスポーツ観戦と過去 1 年間でラグビーの観戦、福岡会場観戦招待事業を除く RWC2019 の観戦の 3 点を調査した【表 5】。

【表 5 運動やスポーツの観戦についての各種実態】

観戦の実数		①会場で		②PVで		③TVで		観てない	
観戦招待前のスポーツ観戦	小 702	338	48.1%	13	1.9%	335	47.7%	206	29.3%
	中 946	506	53.5%	24	2.5%	462	48.8%	269	28.4%
	高 712	447	62.8%	39	5.5%	342	48.0%	81	11.4%
	合計 2360	1291	54.7%	76	3.2%	1139	48.3%	556	23.6%
過去1年のラグビー観戦	小 706	20	2.8%	7	1.0%	235	33.3%	443	62.7%
	中 963	28	2.9%	10	1.0%	247	25.6%	686	71.2%
	高 726	28	3.9%	15	2.1%	202	27.8%	481	66.3%
	合計 2395	76	3.2%	32	1.3%	684	28.6%	1610	67.2%
観戦招待以外のRWC2019	小 679	54	8.0%	8	1.2%	531	78.2%	147	21.6%
	中 932	82	8.8%	19	2.0%	758	81.3%	174	18.7%
	高 665	62	9.3%	36	5.4%	581	87.4%	74	11.1%
	合計 2276	198	8.7%	63	2.8%	1870	82.2%	395	17.4%

【表 5】から、児童生徒の運動やスポーツの「みる」方法として、これまで、運動やスポーツの観戦では、会場で直接観戦することが最も高い割合であった（54.7%）。過去 1 年間でラグビーの試合観戦では、観戦していないことが最も高い割合であった（67.2%）。そして、福岡会場観戦招待事業を除く RWC2019 では、TV やインターネットでの観戦が最も高い割合であった（82.2%）。これまで、運動やスポーツを TV やインターネットで観戦した割合が 48.3%だったことから、今回の RWC2019 においては、運動やスポーツの「みる」方法が大きく変化したことが分かる。

検証結果：【仮説 2】の検証（「みる」意識の変容）

【仮説 2】（「みる」意識の変容）は、p. 17 【図 14】【図 15】、【図 16】から会場で直接観戦することによって運動やスポーツを観戦する「みる」意識に高まりと有意差が確認できた。

また、【表 5】から、RWC2019 を実際に TV やインターネットで観戦した児童生徒が 8 割を超えていることが分かった。「みる」意識の高まりが行動にまで反映されて表れた結果であると考え。

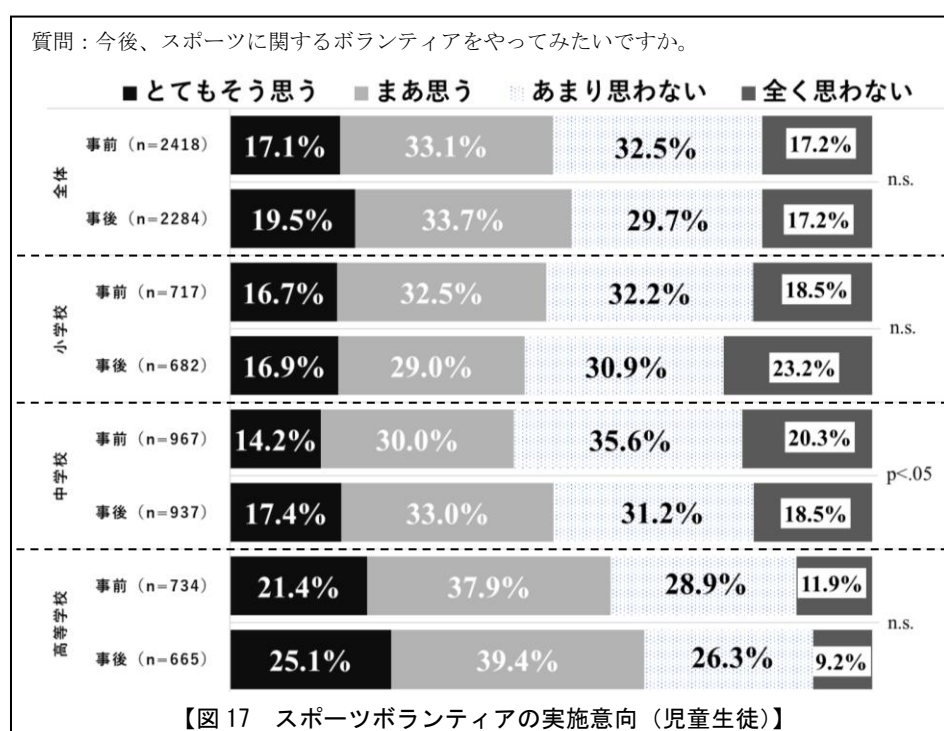
以上のことから、【仮説 2】は支持された。

考察：【仮説2】の検証（「みる」意識の変容）について（p. 17 - 18）

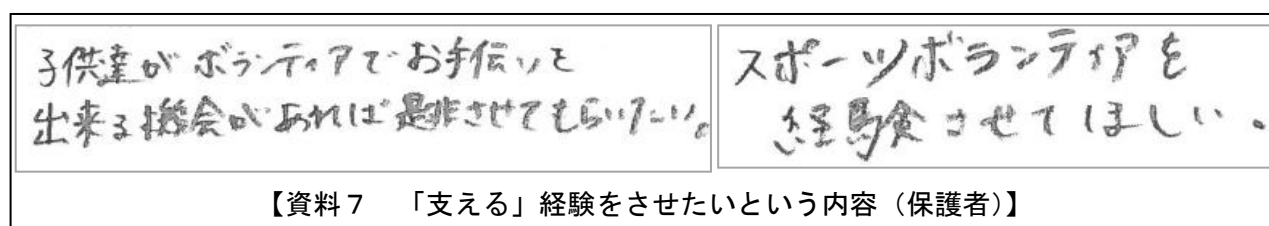
【仮説2】について、運動やスポーツを「みる」意識の高まりが確認され、支持された。福岡会場観戦招待事業に参加したことでラグビーの観戦という「みる」楽しみ方を実感できたからではないかと考える。さらに、実際に「みる」関わり方として、TVやインターネットでの観戦は、福岡会場観戦招待前の運動やスポーツの観戦率が48.3%であったのに対し、RWC2019の試合では82.2%と増加している。日本全国でもRWC2019の盛り上がりや視聴率の高さが報道等で報じられているが、関東地区での瞬間最高視聴率が53.7%であったことを考えると、福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の視聴率は非常に高かったといえる。また、アンケートの質問として「みる」方法を①から④に分けたことで、児童生徒が運動やスポーツを「みる」方法についても認識が広がったのではないかと考える。

(3) 【仮説3】の検証（「支える」意識の変容）

運動やスポーツを「支える」ことについて、「今後、スポーツに関わるボランティア活動を行いたいと思いますか」という質問の事前と事後の回答結果を【図17】に示す。



【図17】から、中学校にのみ事前事後間の有意差を確認できた ($p<.05$)。小学校では、事後の「とてもそう思う」と「まあ思う」の回答の合計が45.9%で事前の合計49.2%よりも3.3ポイント減少した。高等学校では、事後の「とてもそう思う」と「まあ思う」の回答の合計が64.5%で事前の合計59.3%よりも5.2ポイント増加した。また、保護者アンケートの自由記述からは「支える」経験をさせたいという意見が多数見られた【資料7】。



検証結果：【仮説3】の検証（「支える」意識の変容）

【仮説3】（「支える」意識の変容）は、全体では有意差を確認できなかった (n.s.) が、中学校にのみ有意差を確認した ($p<.05$)。また、高等学校において、有意差が確認できなかったものの (n.s.)、事前の回答では「とてもそう思う」が21.4%、「まあ思う」が37.9%となり、合わせて59.3%がスポーツボランティア活動を行いたいと回答し、事後では「とてもそう思う」が25.1%、「まあ思う」が39.4%となり、合わせて64.5%がスポーツボランティア活動を行いたいと回答した。事前事後間で4.8ポイント増加した。

以上のことから、【仮説3】は一部（中学校）で支持された。

考察：【仮説3】の検証（「支える」意識の変容）について（p. 19）

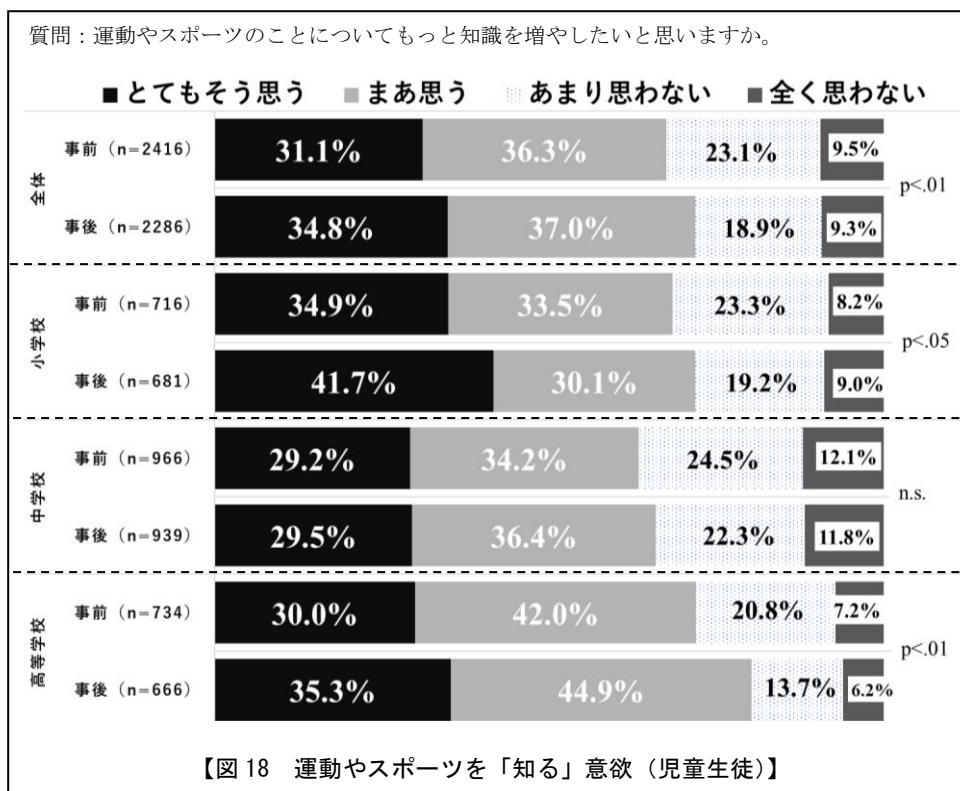
【仮説3】について、運動やスポーツを「支える」意識の高まりが中学校で有意差を確認できた。スポーツボランティアをやる意欲としては、高等学校の数値の割合が最も高かった。つまり、高等学校の生徒が、小学校・中学校の児童生徒よりも運動やスポーツに対して「支える」意識が高かったのではないかと推察される。そして、事後の回答との差が小さかったため、有意差を確認できなかったのではないかと考える。これは、生徒の自由記述からも確認された【資料8】。

今更「する」の関わり方をしめて、沢山の入に支えてもらった分、
次は、私が「する方」を支えたいと思ったから。
アスリートトレーナーになりたいから

【資料8 「支える」意欲を示す内容（高等学校の生徒）】

(4) 【仮説4】の検証（「知る」意識の変容）

「運動やスポーツのことについてもっと知識を増やしたいと思いますか」という質問の事前と事後の結果を【図18】に示す。



【図18】から、中学校にのみ事前事後間の有意差を確認できなかった（n.s.）。小学生では（p<.05）、高等学校では（p<.01）、全体では（p<.01）で有意差を確認できた。中学校の事前の回答では、「とてもそう思う」が29.2%、「まあ思う」が34.2%であり、合わせて63.4%だったのに対し、事後の回答では、「とてもそう思う」が29.5%、「まあ思う」が36.4%であり、合わせて65.9%となった。事前事後間で2.5ポイント増加した。小学校・高等学校でも同様に事後の数値が増加した。

検証結果：【仮説4】の検証（「知る」意識の変容）

【仮説4】（「知る」意識の変容）は、中学校以外で有意差を確認できた。中学校では有意差を確認できなかった（n.s.）ものの、事前事後間で知る意欲を示す回答が2.5ポイント増加していることが確認できた。全体及び小学校・高等学校に事前事後間の有意差を確認できたことから、観戦によって児童生徒の運動やスポーツを「知る」ことに関する意識が高まったといえる。

以上のことから、【仮説4】は支持された。

考察：【仮説 4】の検証（「知る」意識の変容）について（p. 20）

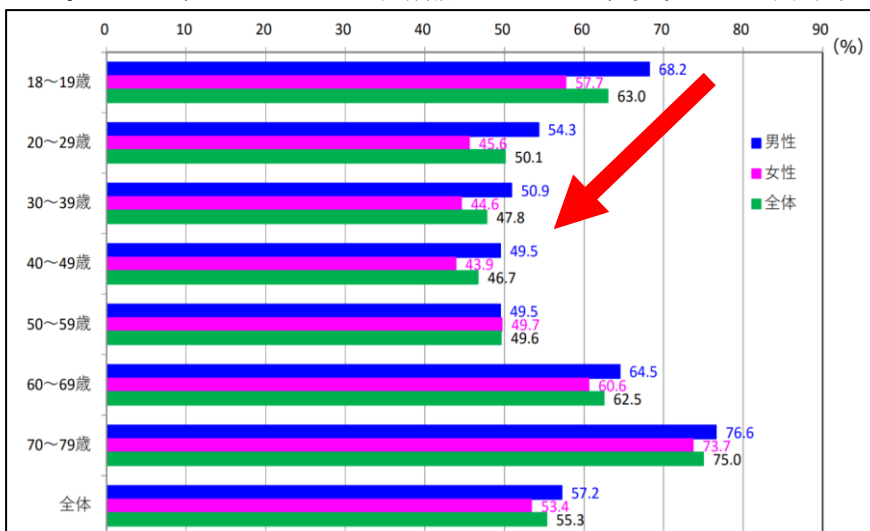
【仮説 4】について、運動やスポーツを「知る」意識の変容では、中学校でのみ有意差を確認できなかったが、事前事後間の数値の高まりが有意差のあるものと同様であると確認し、支持された。また、有意水準が、小学校では（ $p<.05$ ）高等学校では（ $p<.01$ ）と差があった要因としては、「支える」意識と同様に、高等学校の生徒と小学校の児童の意識の違いに、差があったのではないかと考えられる。

考察：【仮説 1-4】の検証（運動やスポーツに関する各種意識の変容）について（p. 11 - 20）

以上の結果と考察から、児童生徒の運動やスポーツに関する各種意識の高まりは全項目において確認できた（一部だけのものを含める）。このことは、児童生徒の運動やスポーツに関する各種意識が、福岡会場観戦招待事業によって高まったことを示していると考ええる。また、「する」「みる」「支える」「知る」それぞれの意識の変容には、小学校から高等学校まで発達の段階による差があったことから、体育の授業での指導には、工夫が必要になると考える。

「する」意識の変容として、今後も継続して運動やスポーツを行っていききたいという意欲に唯一有意差を確認できたのが高等学校である。しかし、スポーツ庁の世論調査によると、現状として高等学校卒業後の 18 歳以降の週 1 日以上のスポーツ実施率は下がっていく傾向がある【資料 9】。意欲が高まることが示された高等学校の時期に、体育理論や保健の授業で卒業後の運動習慣の実態や運動やスポーツの阻害要因等について触れ、事前に考える学習の機会を図ることで、運動習慣の低下が食い止められるのではないかと考える。

「みる」意識の変容として、①会場で直接観戦すること、②パブリックビューイングで観戦すること、③TV やインターネットで



【資料 9】世代別週 1 日以上スポーツ実施率の比較

スポーツ庁「平成 30 年度『スポーツの実施状況等に関する世論調査』」より

観戦することの 3 つの「みる」方法に分類し、さらに④チームや選手を応援することについて調査した。そして、①から④のすべてにおいて有意差を確認した。この結果から、アンケートを実施した児童生徒には、「みる」関わり方の視点が広がったのではないかと考える。さらに p. 18【表 5】から、実際の観戦行動にまで変容があることが分かった。また、スポーツイベント等に参加し、応援する楽しさを味わう手段の 1 つとしてパブリックビューイングが有効ではないかと考える。

「支える」意識の変容として、実施意向が高まることに有意差を確認できたのは中学校であった。RWC2019 のような開催の機会に体育の授業や体育理論でスポーツに関するボランティアについて学習することで、特に中学生には「支える」関わり方に興味を示すと考える。

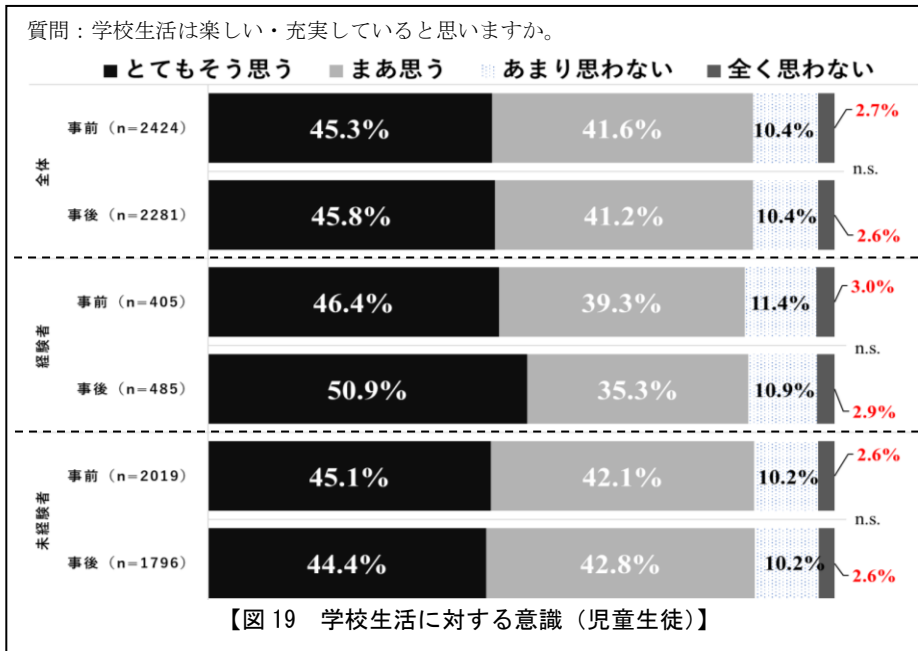
「知る」意識の変容では、小学校・高等学校で有意差を確認できた。中学校では、有意差を確認できなかったが、「知る」意識が向上したことは分かった。発達の段階によって、何を知りたいかという内容も異なることが予想されるため、児童生徒の実態を考慮する必要があると考える。

3 【仮説5】の検証（学校生活及び学習活動に対する意識の変容）

RWC2019 に関する影響は、ラグビーに対してすでに高い関心を抱いている児童生徒により大きくなると考え、学校生活や学習活動に対する意識についても調査した。分析では、ラグビー経験の有無によって「経験者」と「未経験者」の2つの群に分けて比較を行った。経験者には、学校の授業でのラグビー経験を含まないようにした。

(1) 学校生活に対する意識

「学校生活は楽しい・充実している」という質問の事前と事後の結果を【図19】に示す。

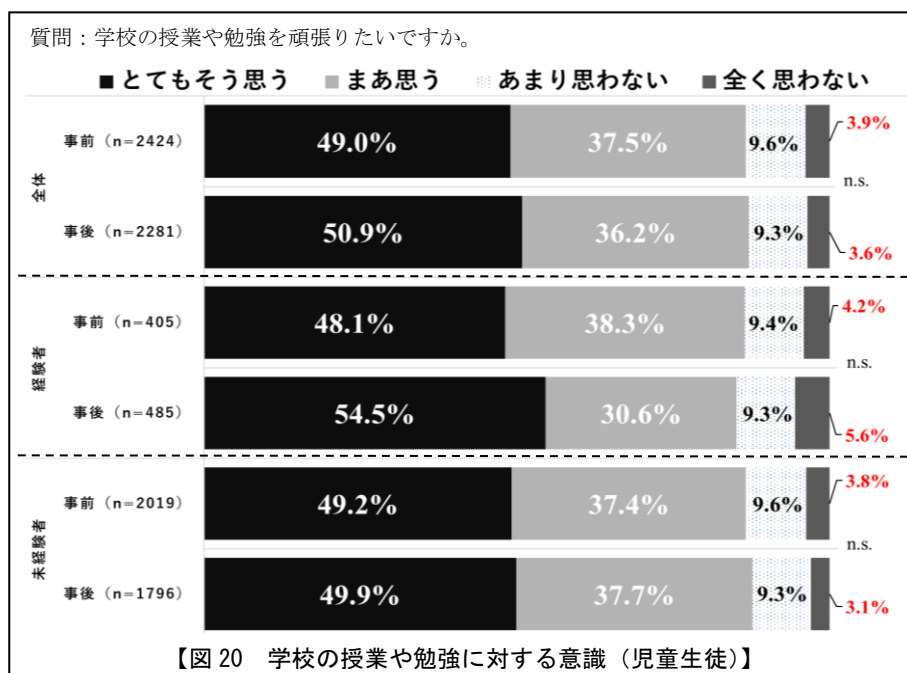


【図19】から、全体及び経験者・未経験者共に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。

経験者の「とても思う」の回答では、事前で46.4%から事後は50.9%と事前事後間で4.5ポイント増加しているのに対し、未経験者では、事前で45.1%から事後は44.4%と事前事後間で0.7ポイント減少した。

(2) 授業や勉強に対する意識

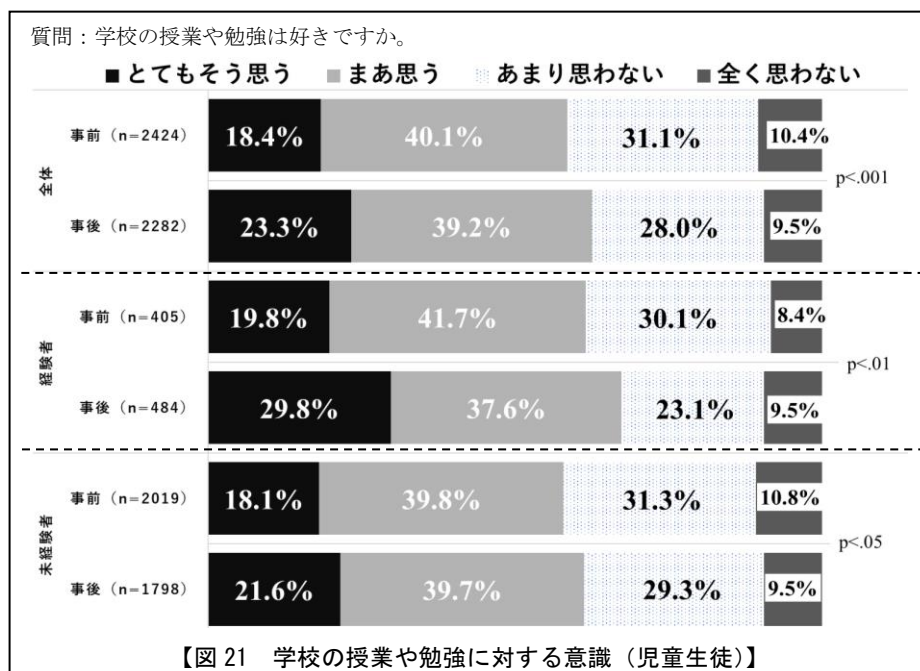
「学校の授業や勉強を頑張りたいですか」という質問の事前と事後の結果を【図20】に示す。



【図20】から、全体及び経験者・未経験者共に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。

しかし、「とても思う」の事前事後間の回答では、経験者が6.4ポイント増加、未経験者が0.7ポイント増加、全体では1.9ポイント増加し、学校の授業や勉強を頑張ろうとしていることが窺える。さらに、経験者の変化の方が、未経験者の変化よりも大きかった。

次に「学校の授業や勉強は好きですか」という質問について分析した結果を【図 21】に示す。

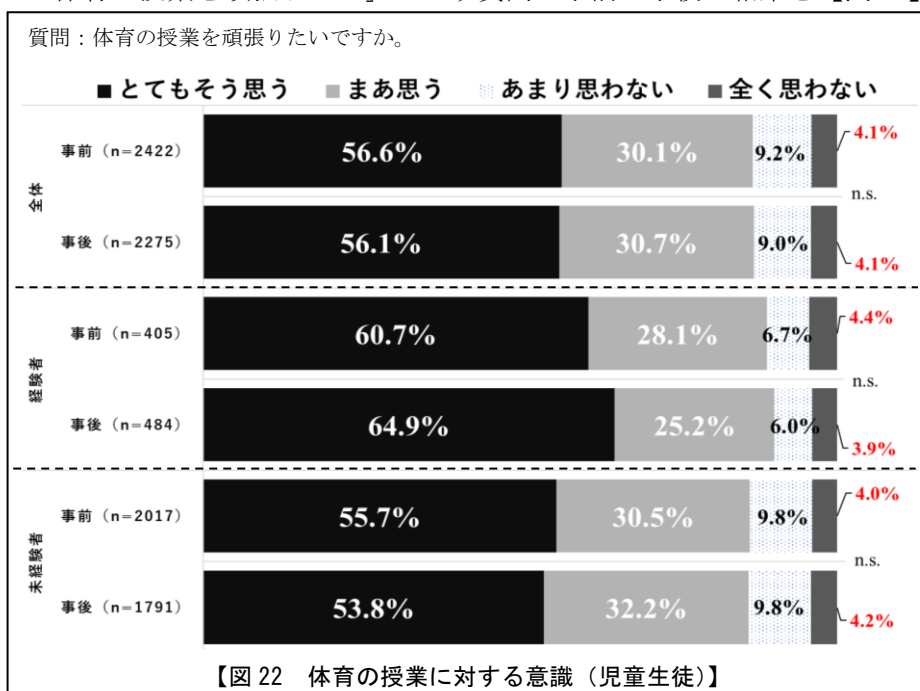


【図 21】から、全体及び経験者・未経験者共に事前事後間の有意差を確認できた。経験者は(p<.01)、未経験者は(p<.05)、全体では(p<.001)であった。

「とても思う」の事前事後間の回答では、経験者が10.0ポイント増加、未経験者が3.5ポイント増加、全体で4.9ポイント増加している。つまり、福岡会場観戦招待事業によって学習活動に対する意識が高まったことが分かる。

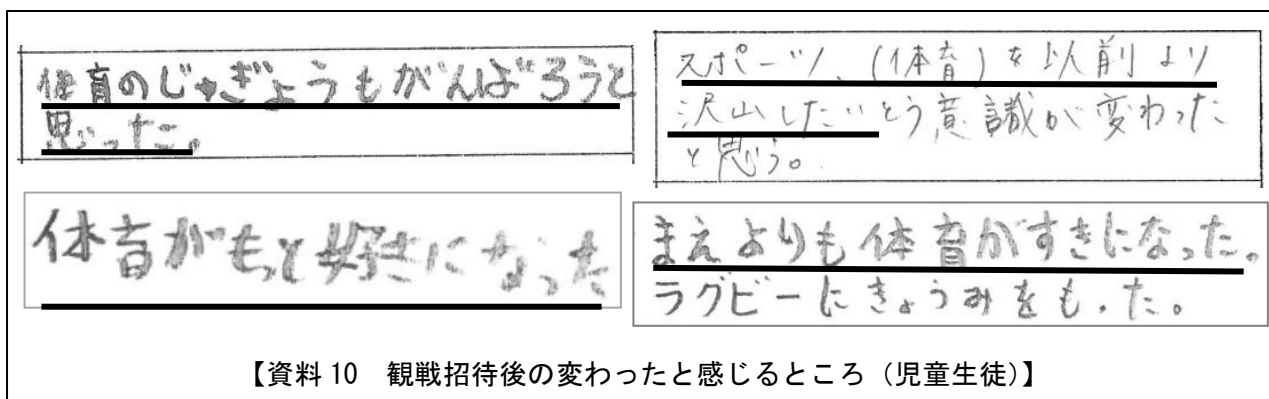
(3) 体育の授業に対する意識

「体育の授業を頑張りたい」という質問の事前と事後の結果を【図 22】に示す。



【図 22】から、全体及び経験者・未経験者共に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。

しかし、「とてもあてはまる」の事前事後間の回答では、ラグビー経験者が4.0ポイント増加したのに対して、未経験者が2.4ポイント減少した。また、福岡会場観戦招待事業の参加によって、体育の授業を頑張りたいと意識が高まったことが窺える児童生徒の自由記述の一部を【資料 10】に示す。



検証結果：【仮説 5】の検証（学校生活及び学習活動に対する意識の変容）

学校の勉強や授業・体育を頑張ろうという意識については、有意差を確認できなかったが、経験者の方が、数値の増加傾向が確認できた。唯一有意差を確認したものが、学校の授業や勉強が好きという意識についてであり、全ての回答に数値の増加がみられた。

しかし、全ての結果からは観戦したスポーツ種目に関心が高い児童生徒ほど、学校生活及び学習活動に対する意識が高まることは確認されたとはいえなかった。

以上のことから、【仮説 5】は棄却された。

考察：【仮説 5】の検証（学校生活及び学習活動に対する意識の変容）から（p. 22 - 23）

学校生活及び学習活動に対する意識として、「頑張りたい」という意識の高まりに有意差は確認できなかった。しかし、経験者はすべての質問で「とてもそう思う」と回答した割合が増加している。さらに、未経験者は増加したり減少したりとさまざまであった。有意差は確認できなかったものの、RWC2019 における学校生活への影響は、ラグビー経験の有無によって違いがあり、特に経験者に学校生活及び学習活動に対して「頑張りたい」という影響を与えたと考える。

また、「学校の授業や勉強が好き」という意識には増加の傾向がみられ、有意差も確認できた。さらに、経験者の方が未経験者よりも高い有意水準（ $p<.01$ ）を示したことから、福岡会場観戦招待事業の参加によって、経験者には、より学校生活及び学校行事への意識が高まったといえる。児童生徒とその保護者の自由記述からも、実際に学校生活及び学習活動で行動の変容が窺えたり、評価が高まったりしたことが分かる内容があったため、その一部を【資料 11】に示す。

○児童生徒の記述

仲間とも仲良くなれたし。

みんなと一つになれた

試合を見て負けていても諦めな
い選手が、さすが世界で戦っている選手
だなと思う。T.O

部活動での行動などが
変わったと思う。

○保護者の記述

より一層 部活を真剣に
とりこんでいるように思う。

楽しそうだった。
1年に1度のいい経験も
大好きな仲間と体験でき
とても満足していた。

クラスでラグビーについて調べ、まとめ、発表
するという行事があり、はじめから最後
まで楽しく耳を凝らしていた。
「ラグビー熱を冷めろ」と言っていた。

今、頑張っているスモールを、更に
やる気が出たようです。

学校生活に楽しさができた事に
ハリが出たような気がします。

【資料 11 福岡会場観戦招待事業による児童生徒の変化や評価】

【資料 11】の「みんなと仲良くなれた・一つになれた」（小学5年生・男子）、「部活での行動が変われた。」（高校2年生・女子）、「調べ学習に楽しく取り組んでいた」（小学生の保護者）、「部活動により一層取り組んでいる」（中学生の保護者）といった内容から、スポーツの試合を観戦することで、行動の変容にまで至った児童生徒がいることが考えられる。

さらに、p. 23【資料 10】の「体育の授業も頑張ろうと思った」（小学 5 年・女子）、「体育がもっと好きになった」（中学 1 年・男子）、「スポーツ（体育）を以前より沢山したいという意識になった」（高校 2 年・女子）といった内容から、体育の授業を頑張りたいと意識が高まったことが窺える。有意差は確認できなかったが、福岡会場観戦招待事業によって体育の授業に対する意識が高まった児童生徒がいることも自由記述から確認できる。

経験者の学校生活や学習活動に対する意識が高まっていることは確認できたが、有意差が確認できなかった要因として、有効回答となった度数（n）が未経験者よりも少なく、全体の 5 分の 1 を下回ったために事前事後間には、統計的な比較とならなかったことも要因であるのではないかと考えられる。今後、同様の調査を行う際には、認知度や普及の進んでいる種目を対象とし、有効回答数が確保できるように留意する必要がある。また、学校代表者への事前アンケートでは、福岡会場観戦招待事業によって児童生徒がどのように変化してほしいかを訊ねた結果、学校生活や学習活動に対する期待がなかった。学校の教員が学校生活や学習活動の改善を期待していない点も、有意差が確認できなかった要因の 1 つではないかと考える。

【仮説 5】の検証によって、学校のスポーツイベントへの参加が、学校生活及び学習活動に対する意識の高まりに影響を与えていることを確認したものの、統計的な結果まで得ることができなかった。この研究の過程を通して、学校での事前の学習や教育の機会、さらには日々の学習の内容等が、スポーツイベントへの参加によって、学校生活及び学習活動に対する意識に影響を与えているかどうかを検証する必要があると改めて感じた。

4 【仮説 6】の検証（事前学習の機会と児童生徒の意識の変容の関連性）

(1) 事前学習の実際と分析の視点

福岡会場観戦招待事業に参加するにあたり、各学校で事前学習を行っている。事前学習の時間や内容は、校種間だけでなく学校ごとで違いがあることが予測されたため、その内容等を調査した。

その結果、事前学習の時間は、事前学習の平均（mean）が 3.25 時間、標準偏差（S.D.）が 3.01 時間、中央値（median）が 2.00 時間、最頻値（mode）が 1.50 時間であった。そこで、事前学習の時間が 7 時間以上を「多い群」（n=486）、2～6 時間を「平均群」（n=864）、2 時間未満を「少ない群」（n=1070）の 3 つの群に分けて各種意識の変容に関してクロス集計を行うこととした。このことにより、事前学習の時間的な長さと児童生徒の意識の変容に関係があったかどうかを示すことができると考えた。

事前学習の調査結果については、時間を【表 6】内容を【表 7】に、事前学習の実際の様子を p. 26【資料 12】に示す。

【表 6 事前学習の時間】

	2 時間未満	2～6 時間	7 時間以上
小学校	7 校	1 校	2 校
中学校	3 校	3 校	2 校
高等学校	7 校		
児童生徒数（n）	1,070（43.5%）	864（36.0%）	486（20.5%）

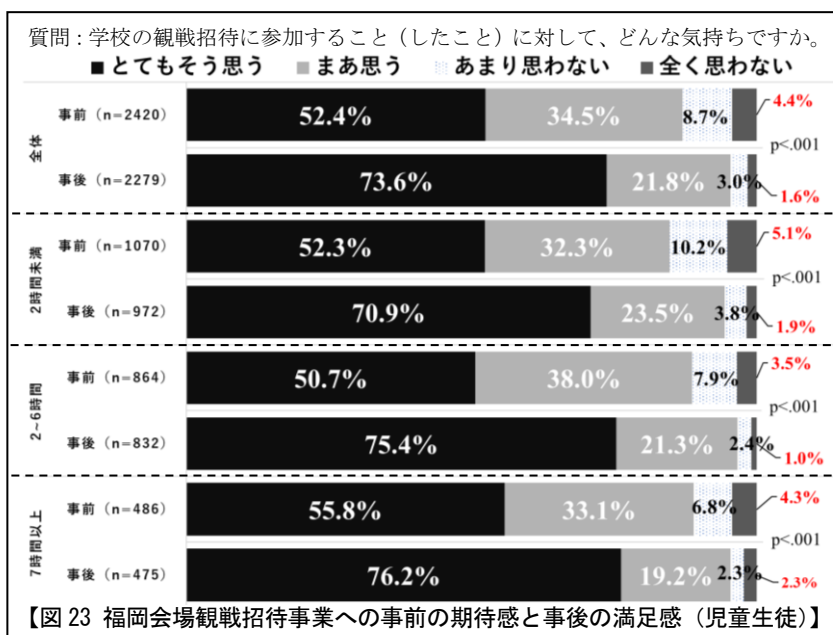
【表 7 事前学習の内容】

	活動内容
授業	○体育で（タグ）ラグビーを実施 ○音楽で観戦する国の国歌を題材に実施 ○道徳でダイバーシティ・ノーサイドの精神などをテーマに実施
学級活動等	○毎日国歌の CD を流して練習 ○観戦する国の歴史や文化を学ぶ（調べ学習等）
学校行事等	○福岡県ラグビーフットボール協会やトップリーグ・実業団の選手等を外部講師として招き、ラグビーについて講話や実技を実施



(2) 福岡会場観戦招待事業の期待感と満足感

福岡会場観戦招待事業への期待感と満足感について、結果を【図 23】に示す。



【図 23】から、全体及び全ての群に事前事後間の有意差を確認できた(p<.001)。

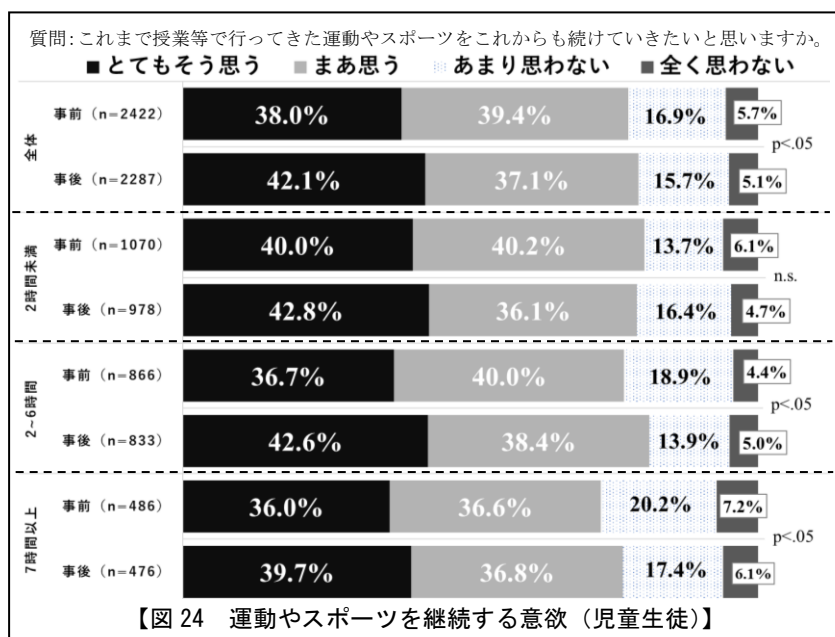
群別にみると、事前学習が「少ない群」では、事前の「とてもそう思う」が52.3%、事後が70.9%となり、事前事後間で18.6ポイント増加した。事前学習が「多い群」では、「とてもそう思う」が55.8%、事後が76.2%と20.4ポイント増加した。事前学習の時間の増加に伴い「とてもそう思う」と答えた割合が多いことが分かる。

(3) 運動やスポーツに関する各種意識の変容

運動やスポーツに関する各種意識の変容として、「する」「みる」「支える」「知る」についてそれぞれ結果を示す。

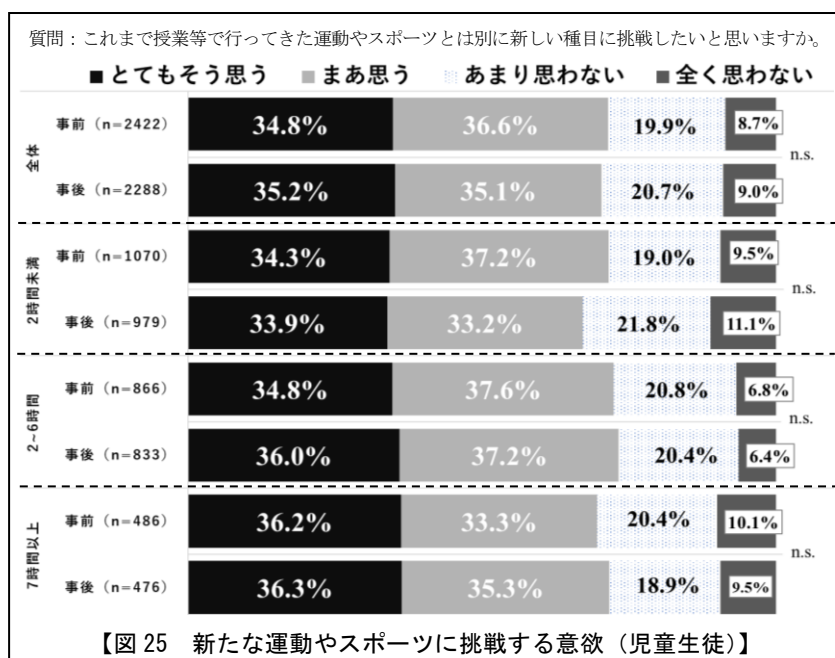
ア 「する」意識の変容

運動やスポーツを「する」関わり方として「これまで授業等で行ってきた運動やスポーツをこれからも続けていきたいと思えますか」という質問（運動やスポーツを継続する意欲）と「これまで授業等で行ってきた運動やスポーツとは別に新しい種目に挑戦したいと思えますか」という質問（新たな運動やスポーツに挑戦する意欲）について分析した結果を【図 24】【図 25】に示す。



【図 24】から、事前学習の「少ない群」以外で事前事後間の有意差を確認できた(p<.05)。

全体では、運動やスポーツを継続する意欲が分かる回答「とてもそう思う」と「まあ思う」を合わせた割合が、事前は77.4%であった。事後は、79.2%となり、事前事後間では1.8ポイント増加した。この数値の変化は、事前学習時間の「平均群」・「多い群」においても確認された。一方、「少ない群」では、事前事後間で1.3ポイント減少した。



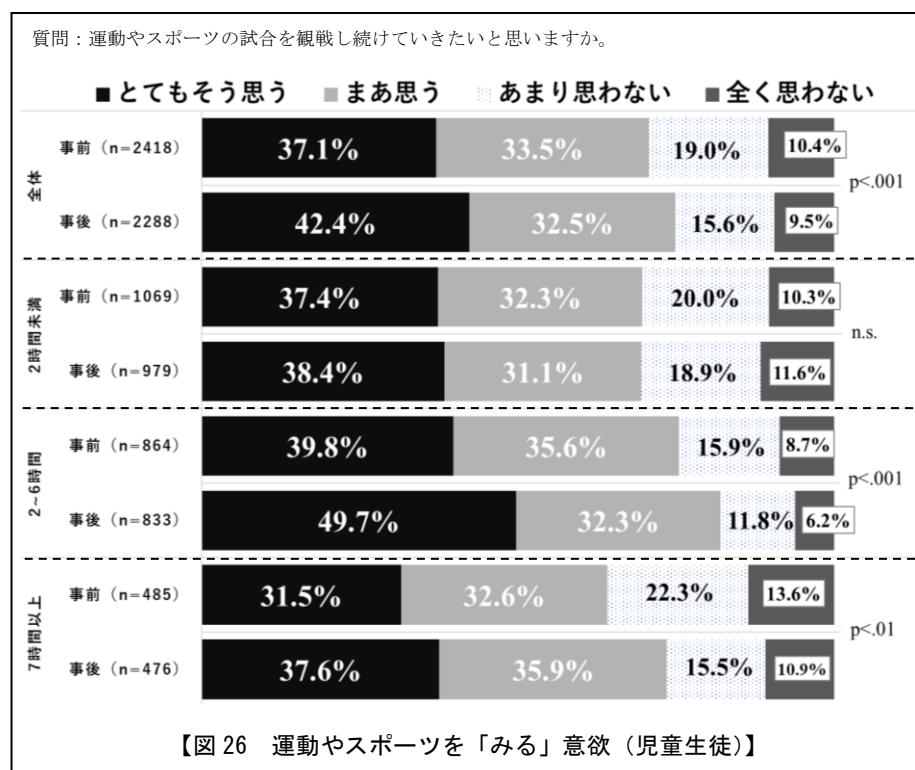
【図 25】から、全体及び全ての群に事前事後間の有意差を確認できなかった(n.s.)。

p. 14【図 12】の結果からも、全ての結果で有意差を確認できなかった(n.s.)。

事前事後間で「とてもそう思う」と「まあ思う」を合わせた数値を群別にみていくと、事前学習が「多い群」では2.1ポイント増加、「平均群」では1.6ポイント増加、「少ない群」では4.4ポイント減少している。

イ 「みる」意識の変容

運動やスポーツを「みる」関わり方として「運動やスポーツの試合を観戦し続けていきたいと思いませんか（直接観戦、パブリックビューイング、TV、インターネット等含む）」という質問について分析した結果を【図 26】に示す。

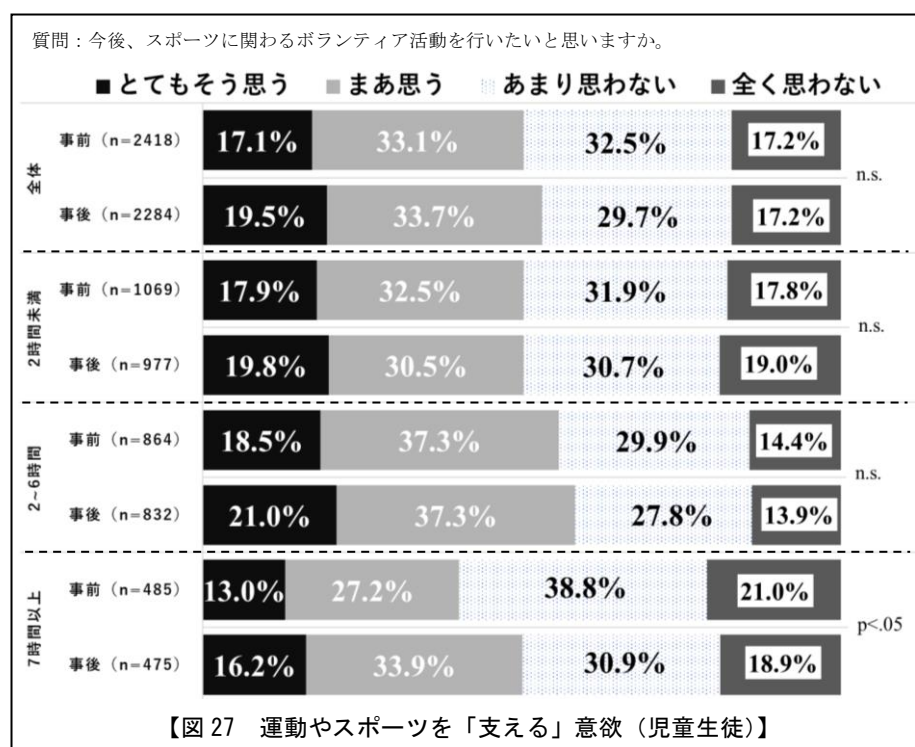


【図 26】から、事前学習の「少ない群」以外で事前事後間の有意差を確認できた。

p. 17【図 14】から p. 18【図 16】の結果でも多くの項目で有意差を確認している。事前事後間で「とてもそう思う」と「まあ思う」を合わせた数値を群別にみていく。事前学習が「多い群」では9.4ポイント増加し、「平均群」では6.6ポイント増加、「少ない群」では0.2ポイント減少している。さらに事前学習の「多い群」と「平均群」では有意差をそれぞれ確認できた。事前学習の機会が多くなることで、運動やスポーツを「みる」意欲が高まったといえる。

ウ 「支える」意識の変容

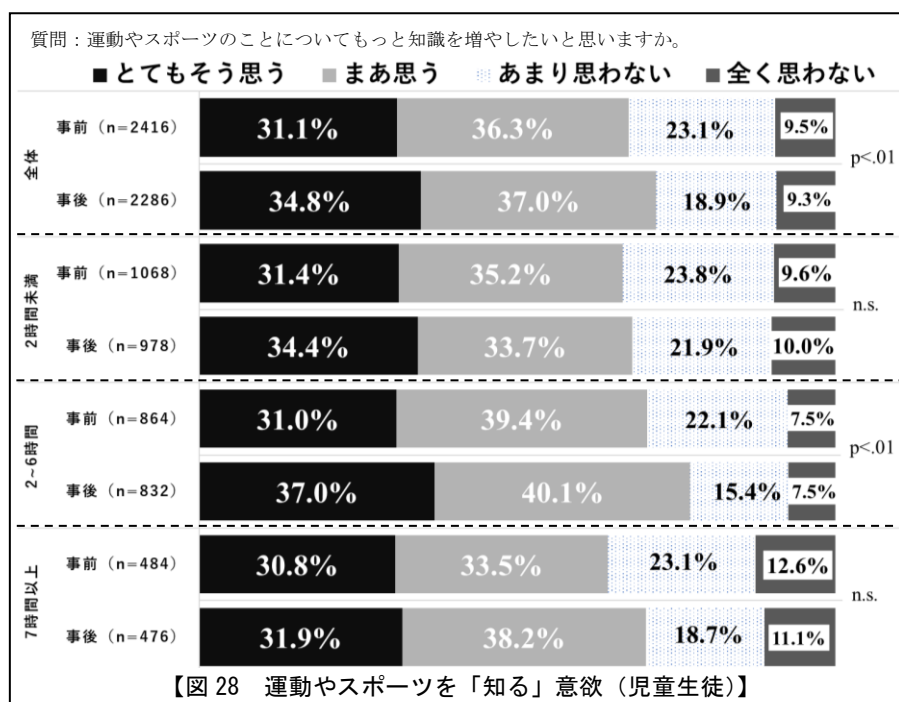
運動やスポーツを「支える」意欲について「今後、スポーツに関わるボランティア活動を行いたいと思いませんか」という質問の事前と事後の結果を【図 27】に示す。



【図 27】から、事前学習の「多い群」にのみ事前事後間の有意差を確認できた(p<.05)。全体の結果をみると、事前の「支える」意欲は「とてもそう思う」が17.1%、「まあ思う」が33.1%であり、合わせた50.2%に意欲があることが分かる。事後の「とてもそう思う」は19.5%、「まあ思う」が33.7%であり、合わせた53.2%に意欲があることが分かる。この数値の変化は、「平均群」においても確認できた。

エ 「知る」意識の変容

運動やスポーツを「知る」意欲について「運動やスポーツのことについてもっと知識を増やしたい」と思いますか」という質問の事前と事後の結果を【図 28】に示す。



【図 28】から、全体と事前学習の「平均群」にのみ有意差を確認できた(p<.01)。全体の結果をみると、事前の「知る」意欲は「とてもそう思う」が31.1%、「まあ思う」が36.3%であり、合わせた67.4%に意欲があることが分かる。事後の「とてもそう思う」は34.8%、「まあ思う」が37.0%であり、合わせた71.8%に意欲があることが分かった。事前事後間での「知る」意欲は、4.4ポイント増加したことが分かる。この事前事後間の数値の変化は、全ての群において確認できた。

検証結果：【仮説 6】の検証（事前学習の機会と児童生徒の意識の変容の関連性）

RWC2019 において、p. 26【図 23】から【図 28】の結果から、学校での事前学習の機会が多い方が、児童生徒の運動やスポーツに関する各種意識が向上し、福岡会場観戦招待事業への満足度も高かったといえる。

以上のことから、【仮説 6】は支持された。

考察：事前学習の機会と児童生徒の意識の変容の関連性から（p. 25 - 29）

本調査研究を進めるにあたり、大規模国際スポーツ大会開催にあたって地域の児童生徒へ関わる機会と、学校現場での教育活動の機会という2つを児童生徒に効果的・意図的に与えることが、スポーツの価値を認識するだけでなく、運動やスポーツへの関わり方の意識を高めることにつながるのではないかと考えた。また、p. 26【資料 12】のように、今回、外部講師という形で中学生に90分の事前学習を実施した。対象が中学校1・2・3年生のラグビー部員であったため、顧問の先生との打合せの下、内容を事前に検討し、ラグビーの基本的なルール等を教えるのではなく、RWC という大会の歴史や観戦するイタリアとカナダという国・チームの魅力などを伝え、「一生に一度」かもしれないと思うほど貴重な機会であると感じ取ってもらうことを目的として講義を行った。RWC2019 で海外から称賛を受けた「スクラムユニゾン※」の活動のように、両国国歌の練習を行い、日本流のおもてなしを実際に体験してもらう機会とした。事前学習での生徒の姿に、ラグビー経験者でも初めて知ったことや興味があることに目を輝かせて当日の観戦に期待を寄せている様子を肌で感じる事ができ、事前学習の必要性和その効果の大きさを実感した。

児童生徒の福岡会場観戦招待事業への事前の期待感と事後の満足感については p. 26【図 23】で、事前学習の時間が長くなるにつれ、満足感の回答の「とてもそう思う」と回答した割合が増えており、有意差も確認されている。

※スクラムユニゾンとは、世界19ヵ国から来る選手やファンを国歌等を歌っておもてなしをしようと結成されたプロジェクトのことである。(https://www.scrumunison.com/)

運動やスポーツを継続する意欲については、p. 27【図 24】の結果と、p. 13【図 11】のように、高等学校にだけ有意差を確認できた($p<.05$)。さらに p. 25【表 6】のように、高等学校の全てが事前学習の「少ない群」に該当することから、高等学校では、事前学習の時間の長さとは関係なく、運動やスポーツを継続する意欲が高まったことが分かる。小学校・中学校では、事前学習の時間を十分に確保して福岡会場観戦招待事業に臨んだ方が、運動やスポーツを継続する意欲が向上したことが分かった。このことから、特に小学校・中学校では、事前学習を十分に実施することが、運動やスポーツを継続する意欲の向上に効果的であると考えられる。また、高等学校では事前学習の時間が少なくても運動やスポーツを継続する意欲が高まったことから、小学校・中学校よりも、会場で直接スポーツ観戦をすることの影響があったと考えられる。高等学校では、運動やスポーツを会場で直接観戦することができるだけ生徒に与え、運動やスポーツを継続する意欲が高まるようにさせたい。

p. 28【図 27】から、事前学習の「多い群」にのみ有意差を確認し、その他の群でも同様の数値の変化を確認できた。RWC2019 福岡会場では、ボランティアが約 700 人選出され、会場での誘導や案内だけでなく、会場の外でも大会を支えている光景を見ることができた。福岡でのボランティアの延べ人数は 1565 人となった。会場の外では、ボランティアの方が観客にハイタッチを求め、福岡会場観戦招待の児童生徒を含む多くの観客が試合の前後で大会の雰囲気を感じ、余韻に浸っていた。こうした取組が児童生徒へ影響を与えたのではないかと考える【資料 13】。

p. 28【図 26】と p. 18【図 16】の結果、小学校で唯一、有意差を確認できていない(n.s.)ことや p. 25【表 6】の「平均群」にあてはまる学校は小学校 1 校、中学校 3 校となっていることから、中学校においては、2 時間以上の事前学習によって、生徒の「知る」意欲が高まったことが考えられる。



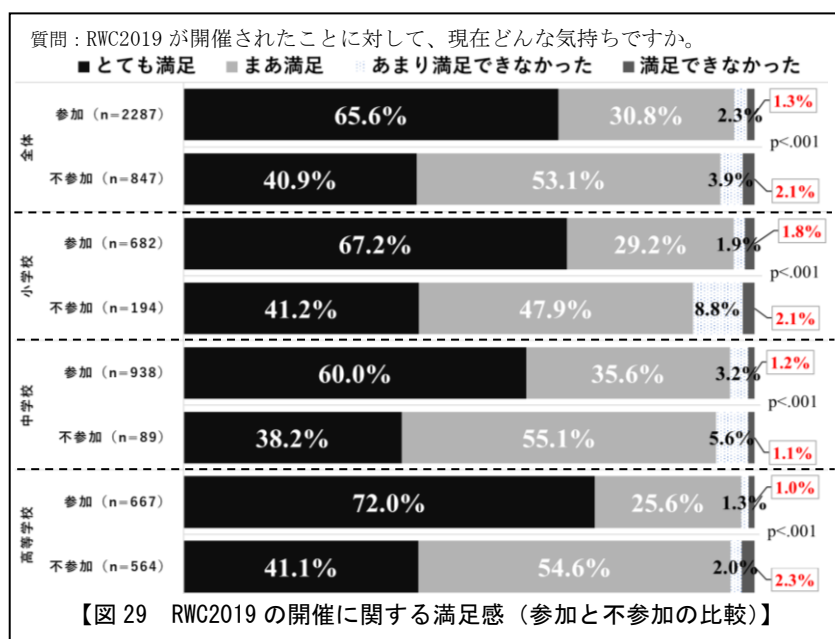
【資料 13 ボランティアの活動の様子】

日本ラグビーフットボール協会より

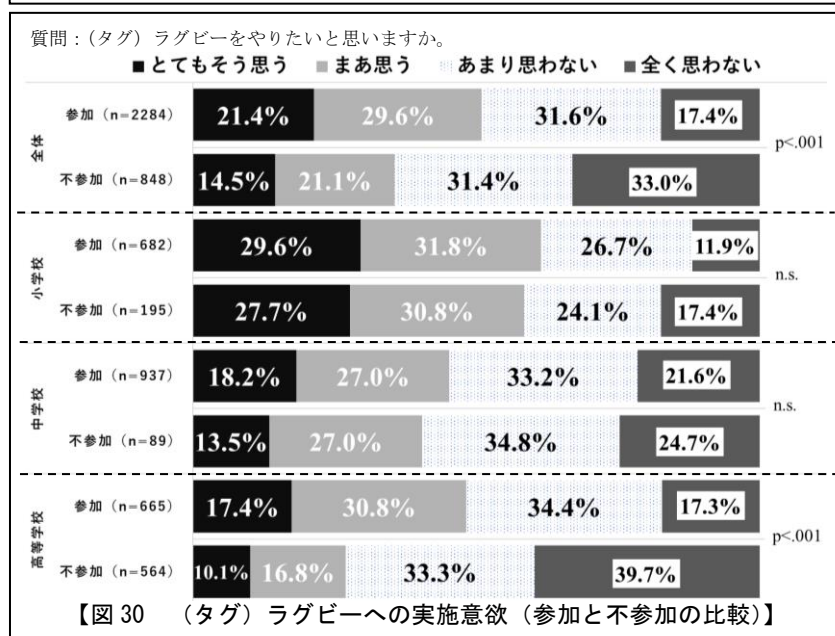
5 福岡会場観戦招待事業に参加していない児童生徒との比較

福岡会場観戦招待事業において、参加校の中で参加していない同年代の児童生徒にも同様のアンケートを実施した。実施の時期は事後アンケートと同時期(2019 年 11 月 5 日から 11 月 22 日)である。回答(参加した児童生徒数との割合)は、小学校が 195 人(25.4%)、中学校が 89 人(8.8%)、高等学校が 564 人(74.9%)となり、合わせて 848 人(33.4%)であった p. 6【表 3】。校種別での差があるものの、比較のサンプルとして 2 割の回収を目標にしていたため、有効回答数は十分に確保できたと考える。ただし、中学校では、参加校 8 校のうち 3 校が全校生徒で参加していたため、十分な回答数が得られなかった。中学校のみを分析する際、統計的に有効な結果を得ることが難しいことが予想される。

これまでの各分析結果に沿って、福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の事後アンケートと比較を行った結果を【図 29】から p. 35【図 40】に示す。また、図では福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒を「参加」、参加していない同年代の児童生徒を「不参加」として示した。さらに、ここでは、各結果の図の結果と併せて考察を述べることにする。

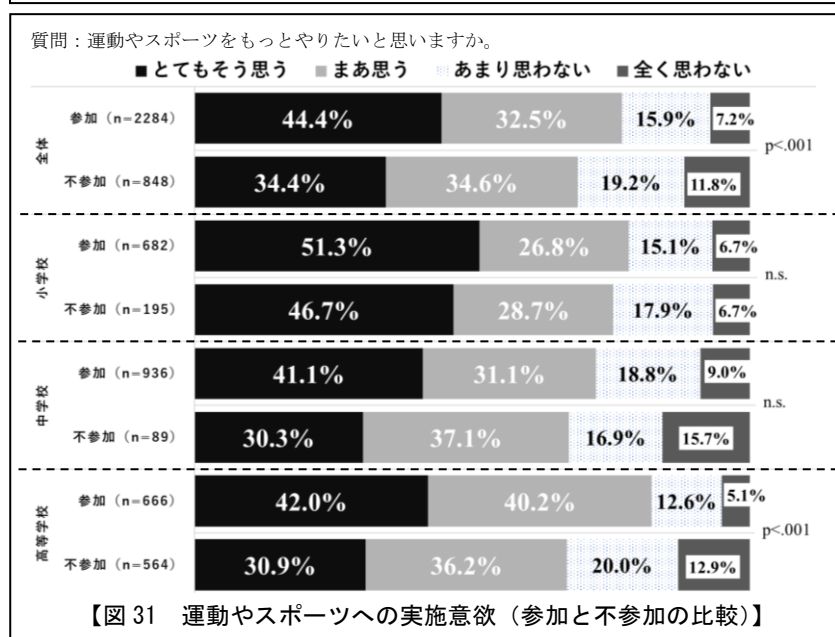


【図 29】から、全体及び全校種に「参加」と「不参加」の間で有意差を確認できた ($p<.001$)。全体では、「参加」の「とても満足」が 65.6%に対し、「不参加」の「とても満足」は 40.9%であり、24.7%の差があった。つまり、福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の方が、RWC2019 への満足感が高く、会場で直接観戦することや RWC2019 に直接関わったことが影響したといえる。

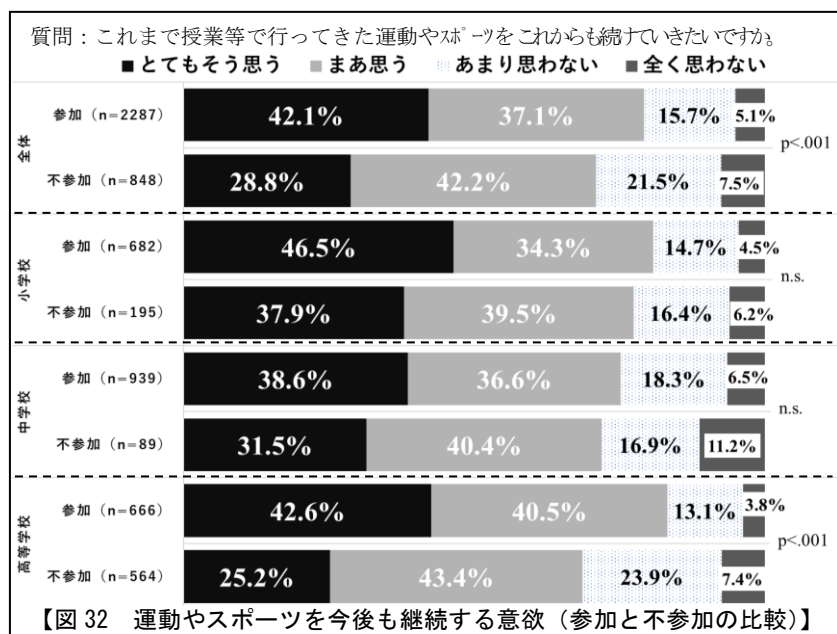


【図 30】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた ($p<.001$)。

【図 29】と同様に、会場で直接観戦することや RWC2019 に直接関わったことで (タグ) ラグビーへの実施意欲も高まったと考える。また、小学校では、「不参加」の児童生徒にも半数を超える実施意欲がみられた。中学校では、「参加」の方が「とてもそう思う」「まあ思う」と回答した割合が高かったが、「不参加」の度数 ($n=89$) が少ないため、有意差を確認できなかったと考える。



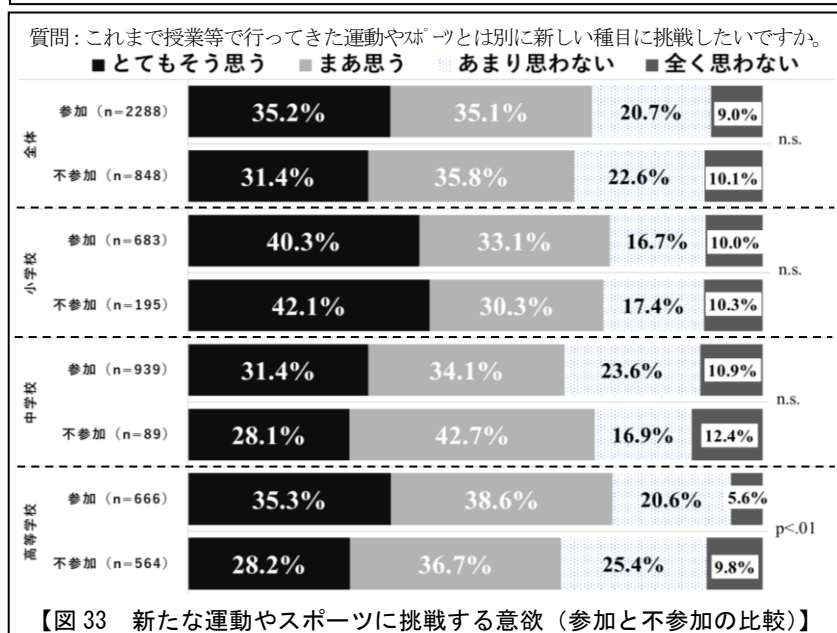
【図 31】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた ($p<.001$)。小学校と中学校では有意差を確認できなかったものの、全体と高等学校と同様の数値の変化を確認できた。このことから RWC2019 を会場で直接観戦したことが運動やスポーツをやりたいという実施意欲につながったと考える。



【図 32】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた (p<.001)。

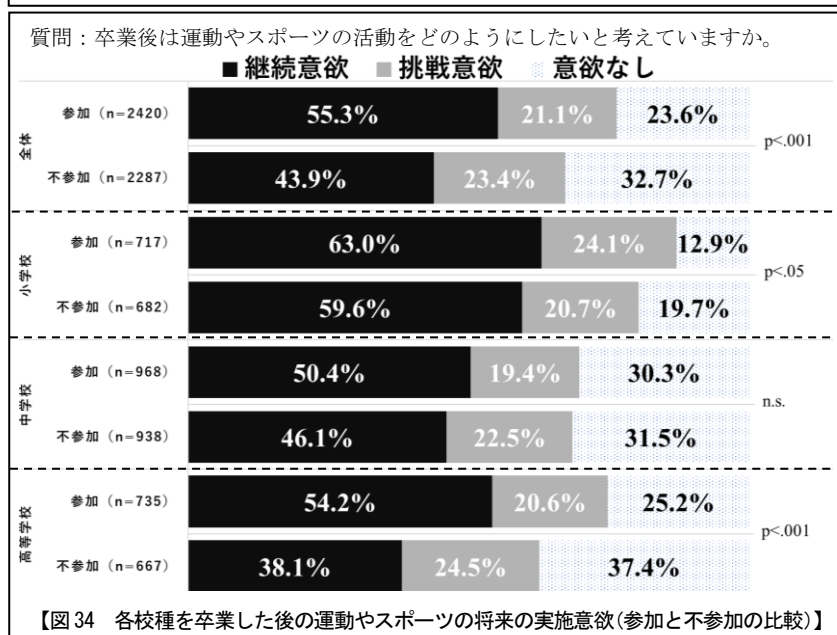
p. 13【図 11】でも全体と高等学校に事前事後間の有意差を確認できている (p<.05)。

有意水準を比較すると【図 32】の方が高くなっている。つまり、運動やスポーツを今後も継続する意欲は、福岡会場観戦招待事業に参加した事前事後の差よりも、「参加」と「不参加」の差の方が影響が大きいと考える。



【図 33】から、高等学校にのみ「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた (p<.01)。

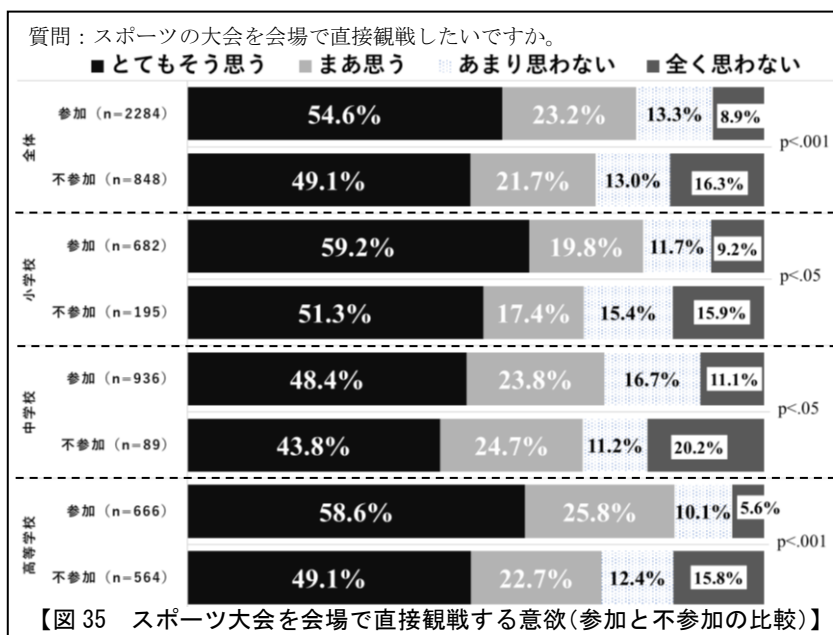
p. 14【図 12】からは有意差を確認できなかったものが、【図 33】では確認できたことから、福岡会場観戦招待事業に参加したことで新しく運動やスポーツに挑戦しようとする意欲が高まったと考える。



【図 34】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた (p<.001)。

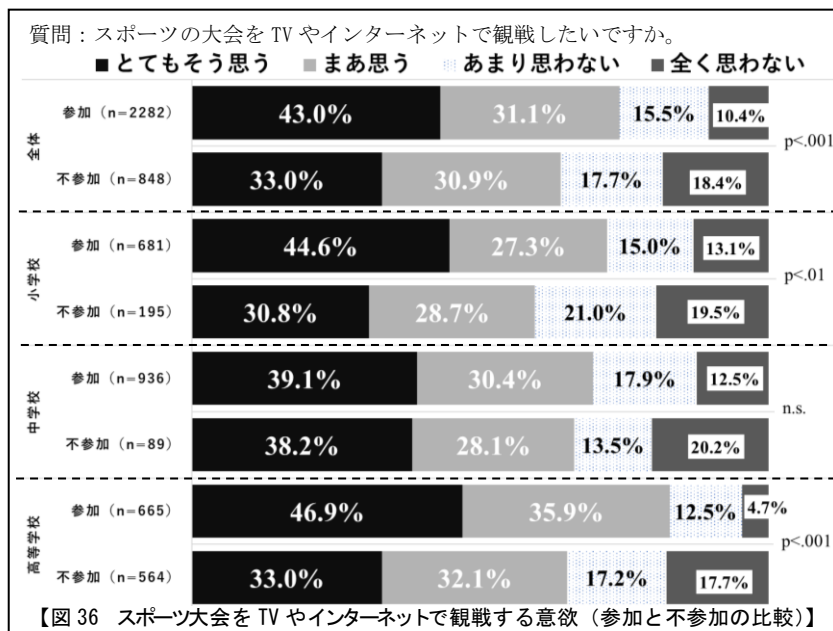
小学校でも有意差を確認できた (p<.05)。

p. 14【図 13】からは有意差を確認できなかったものが、【図 34】では確認できることから、福岡会場観戦招待事業に参加したことで卒業後の運動やスポーツへの将来の実施意欲が高まったと考える。



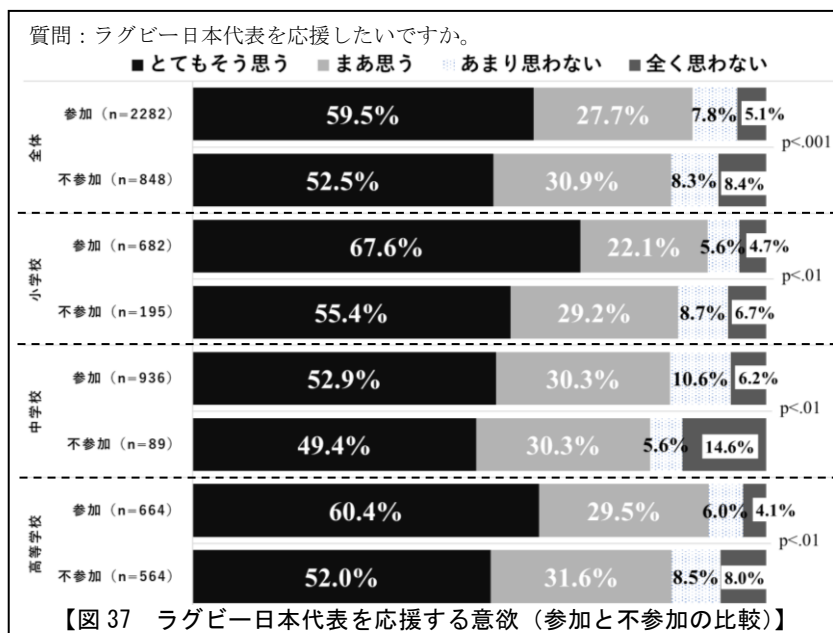
【図 35】から、全体及び全校種に「参加」と「不参加」の間で有意差を確認できた。

全体では「参加」は「とてもそう思う」が 54.6%、「まあ思う」が 23.2% となり、合わせて 77.8% が会場で直接観戦したいと回答し、「不参加」は「とてもそう思う」が 49.1%、「まあ思う」が 21.7% となり、合わせて 70.8% が会場で直接観戦したいと回答した。つまり、RWC2019 を会場で直接観戦したことがスポーツの大会を会場で直接観戦したいという意欲を高めたと考える。



【図 36】の結果、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた (p<.001)。小学校では (p<.01) で有意差を確認できたが、中学校では有意差を確認できなかった (n.s.)。

p. 17【図 15】では有意差を確認できていたものが、【図 36】では確認できなくなったことから、中学校では、スポーツ大会を TV やインターネットで観戦する意欲については、福岡会場観戦招待事業の影響とは別の要因によって高まったことが予想される。



【図 37】から、全体及び全校種に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた。

p. 18【図 16】の結果と比較すると、「参加」は大会後に日本代表を応援する意欲が高まっており、「不参加」よりもその割合が高い。日本代表だけではなく、RWC2019 を観戦した国に興味を持ったり応援したいと思ったりした意識と共に、日本代表も応援したいという意欲が高まったのではないかと考える。このことを示す自由記述を p. 34【資料 14】に示す。

自国に限らず、その国のことを
応援をするようになった

世界の国のことについて考えたり、
興味を持てよう(になった)から。

今までは、興味がなかったのが
観戦後は、1世の試合を観戦したい
と言ったり、日本戦を見に行きたかった
と言ったり、Newsなど見たから
1世のチームの事をしるしを覚えてくれたり
していた。

【資料 14 観戦招待の国に興味を持つ・応援する内容】

さらに、福岡会場観戦招待事業に不参加だった児童生徒の RWC2019 開催前の運動やスポーツ観戦とラグビー観戦、及び RWC2019 の観戦の 3 点について実態を【表 8】に示す。

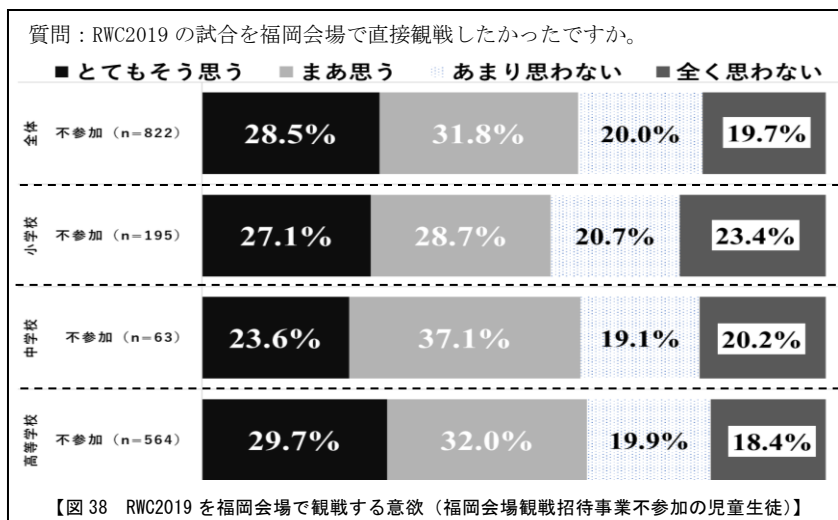
【表 8 福岡会場観戦招待事業不参加の児童生徒の RWC2019 観戦の実態】

観戦の実数		会場で		PVで		TVで		観てない	
RWC2019前のスポーツ観戦	小 195	108	55.4%	13	6.7%	100	51.3%	56	28.7%
	中 89	47	52.8%	2	2.2%	58	65.2%	31	34.8%
	高 564	377	66.8%	23	4.1%	315	55.9%	244	43.3%
	合計 848	532	62.7%	38	4.5%	473	55.8%	331	39.0%
RWC2019前のラグビー観戦	小 195	9	4.6%	4	2.1%	63	32.3%	126	64.6%
	中 89	2	2.2%	2	2.2%	32	36.0%	55	61.8%
	高 564	13	2.3%	3	0.5%	138	24.5%	448	79.4%
	合計 848	24	2.8%	9	1.1%	233	27.5%	629	74.2%
RWC2019	小 195	9	4.6%	5	2.6%	138	70.8%	52	26.7%
	中 89	1	1.1%	2	2.2%	39	43.8%	22	24.7%
	高 564	11	2.0%	11	2.0%	348	61.7%	205	36.3%
	合計 848	21	2.5%	18	2.1%	525	61.9%	279	32.9%

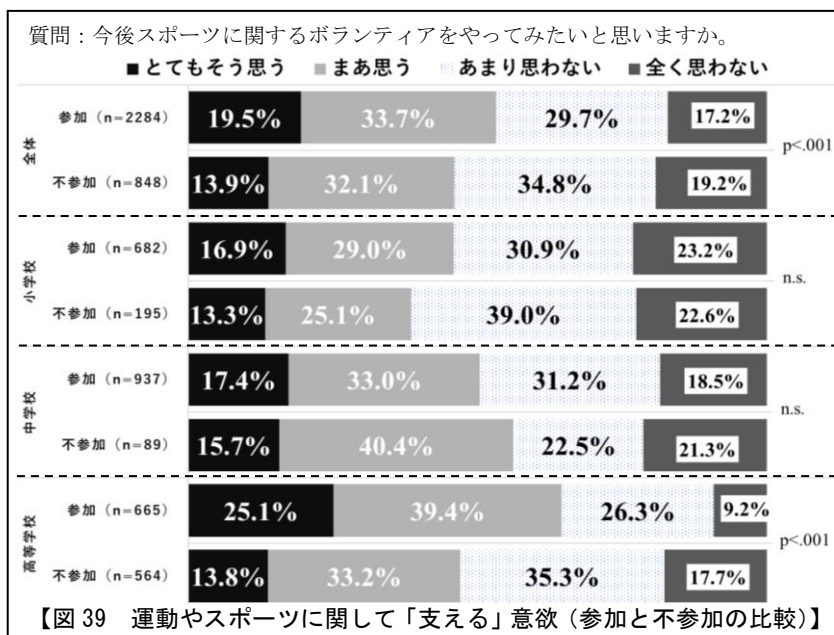
【表 8】と p. 18【表 5】を比較すると、その多くが同様の観戦割合を示した。また、RWC2019 開催前の運動やスポーツを TV やインターネットで観戦した割合が 55.8%だったの対し、今回の RWC2019 を TV やインターネットで観戦した割合が 61.9%と福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の変化に比べ、大きな差は見られなかった。ただし、「不参加」でも RWC2019 を約 6 割の児童生徒が TV やインターネットで観戦したことは、視聴率 (53.7%) と比べて高かったといえる。

このことから、RWC2019 と直接関わったことが関心を高め、TV やインターネットという方法を中心に観戦意欲が高まり、行動にまで変化したことが分かる。

次に、実際に RWC2019 を会場で観戦していない児童生徒には追加で「RWC2019 の試合を福岡会場で直接観戦したかったですか」という質問を設定した。その結果を【図 38】に示す。



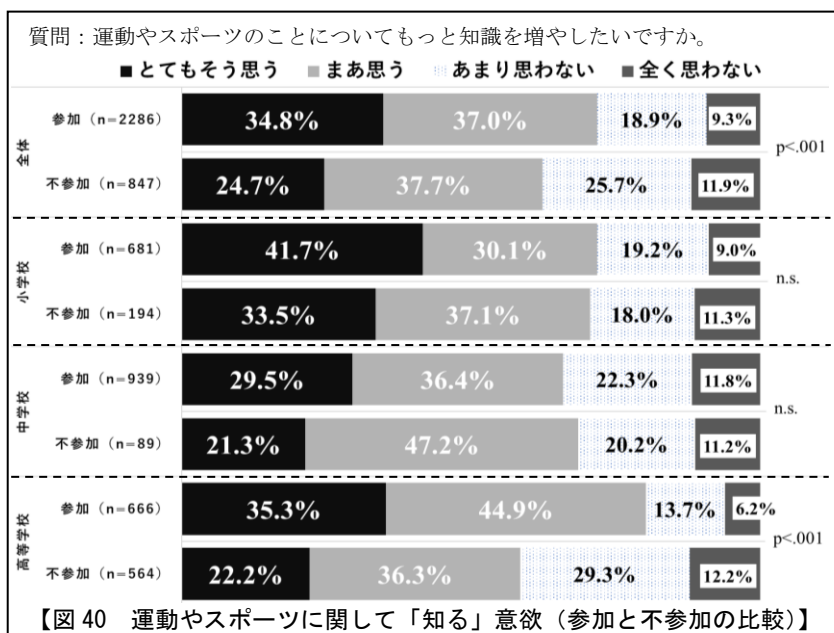
【図 38】から、全体では「RWC2019 の試合を福岡会場で直接観戦したかったですか」という質問に対して「とても思う」が 28.5%、「まあ思う」が 31.8%であり、合わせて 60.3%が会場で試合を直接観戦したいということが分かった。



【図 39】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」の間で有意差を確認できた(p<.001)。

p. 19【図 17】では、中学校のみに事前事後間の有意差を示した(p<.05)が【図 39】では有意差を確認できなかった。

この要因として、福岡会場観戦招待事業に参加した前後の「支える」意識の高まりよりも、福岡会場観戦招待に「参加」と「不参加」とを比べたところ「支える」意識の差の方が、統計的に有意であったということが分かった。



【図 40】から、全体と高等学校に「参加」と「不参加」との間で有意差を確認できた(p<.001)。

全体では「とてもそう思う」が「参加」で 34.8%、「不参加」で 24.7%と「参加」と「不参加」の間で 10.1ポイントの差があることが分かる。また、p. 20【図 18】では参加者の事前事後間の有意差を確認しており(p<.01)、数値の増加も分かる。つまり、福岡会場観戦招待事業に参加したことで「知る」意欲が向上し、「不参加」との差にも、統計的に有意であったことが分かった。

p. 31【図 29】から【図 40】の全ての結果で高等学校では「参加」と「不参加」の間で有意差を確認できた。小学校・中学校においても各意識における「参加」と「不参加」の差に有意な結果を示すことが分かった。このことは、福岡会場観戦招待事業を実施した成果であるといえる。しかし、学校代表者の回答から、参加していない子供たちにラグビーの魅力やスポーツ観戦の楽しさを広げられなかったという意見があった。福岡会場観戦招待事業に参加した学校では、観戦が終わった後の児童生徒への事後指導としてどんなことを行うのか、今後の課題となった。

VII 研究のまとめ

1 結果のまとめ

福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒とその保護者、学校代表者にアンケート調査を実施し、RWC2019の大会前後の児童生徒の運動やスポーツに対する意識の変容について明らかになった。

(1) ラグビーへの関心の変化について

児童生徒のRWC2019前後のラグビーへの関心の変化を調査した結果、事前でも高い期待感を示し、事後ではそれを上回る満足感を得た。この結果は、保護者にも同様の傾向であった。

(2) 運動やスポーツに関する各種意識の変容について

運動やスポーツに関する各種意識の変容には、校種別に違う特徴が表れた。小学校では、特に「知る」ことに関して意欲を高めることが、中学校では、特に「支える」ことに関して意欲を高めることが、高等学校では特に「する」こと「知る」ことに関して意欲を高めることが分かった。また、全校種において、「みる」ことには高い意欲を示し、実際に福岡会場観戦招待事業に参加した児童生徒の8割以上が、RWC2019の試合をTVやインターネットでも観戦していた。

【仮説1】「する」意識について・・・一部（高等学校）で支持

【仮説2】「みる」意識について・・・支持

【仮説3】「支える」意識について・・・一部（中学校）で支持

【仮説4】「知る」意識について・・・支持

(3) 学校生活及び学習活動に対する意識の変容について

学校生活及び学習活動に対する意識の変容には、ラグビーを経験している児童生徒ほど学校の授業や勉強が好きになるという結果を示した。しかし、その他の意識については統計的に効果があるという結果を示すまでに至らなかった。

【仮説5】学校生活及び学習活動に対する意識の変容について・・・棄却

(4) 事前学習の機会と児童生徒の意識の変容の関連性について

事前学習の機会と児童生徒の意識の変容には関係性があることが確認でき、事前学習の機会の確保によって児童生徒がスポーツの価値について認識し、運動やスポーツに関する各種意識を高めることとなった。

【仮説6】事前学習の機会と児童生徒の意識の変容について・・・支持

以上の結果、RWC2019を招致・開催した福岡県の取組は実際に会場で試合を観戦した児童生徒から高い評価を受けた。さらに、その保護者、学校からも高い評価を得ることができた。福岡会場観戦招待事業のように大規模国際スポーツ大会を実際に「みる」経験から、運動やスポーツへの意識には変容があるということを示すこととなった。特に「みる」意識については、その高まりを示すと同時に、実際にTVやインターネットで観戦するという行動にまで変容を示す要因となった。一方で、「すること」「支える」こと「知る」ことには、行動の変容を示すこととなる結果を一部には獲得できたものの、全体としては確認できなかった。これらの行動の変容は、学校代表者からの回答でも確認された。

このような行動の変容から、福岡会場観戦招待という「みる」経験が直接「みる」意識を高め、行動に直結したと考える。また、TVやインターネットなどの普及により、「みる」ことへの行動が簡単になっていることも要因であると考え。このことから、「する」「支える」「知る」ことについても、児童生徒が経験する機会を与えることは重要である。さらに、その経験に、「一生に一度」となるような感動が加わることが行動の変容にもつながるのではないかと考える。児童生徒が忘れられない感動体験を味わうことができるように、今後のスポーツイベント等にも注目して学校の教育活動と関連付けられるようにしたい。

2 成果

- RWC2019 大会前後の児童生徒の運動やスポーツに対する多様な関わり方や意識の変容を明らかにすることができた。特に児童生徒は、運動やスポーツを「みる」楽しさを実感したことで、意識が高まり、行動の変容として RWC2019 を TV やインターネットで観戦するようになった。
- 大規模国際スポーツ大会に児童生徒を観戦招待する成果を得ることができた。加えて、参加するために学校で行う学習の機会の必要性を示すことができた。また、児童生徒へ日々指導していることに加え、スポーツイベント等へ参加することでさらに効果が高まる結果を得ることができた。
- 調査研究を行うことで、授業研究ではない、スポーツの研究という視点を獲得することができた。そして、体育の授業の在り方等について新たな考え方を獲得することができた。

福岡会場観戦招待事業への評価については、参加した児童生徒だけではなく、その保護者からも高い満足度を得ていることが分かった。これまでの調査研究活動では、当事者にのみアンケートを実施することが多かったが、今回の研究で、当事者となる児童生徒だけでなく、その保護者にまで調査したことで、影響の波及効果について考えることができた。学校代表者の回答からも、参加した児童生徒が不参加の児童生徒へスポーツ観戦やラグビーの魅力や楽しさを伝える場面が見られたことや日常の会話の中で運動やスポーツに関する会話が増えたという内容があった。

学校の事前学習の時間を確保することが、運動やスポーツを継続して行おうとする意欲や観戦し続ける意欲、スポーツボランティアをやってみようとする意欲を高めることが分かった。RWC のような大規模国際スポーツ大会が地元で行われることに加え、その試合を観戦すること、そして観戦までに学校で学習の機会を確保することが児童生徒の運動やスポーツのさまざまな関わり方やその意識に影響を与えることが分かった。

3 課題

- 4 月より計画を立てて研究を進めてきたが、アンケートの内容を精選するにあたり、プレアンケート等を実施する必要があった。
- 調査研究で得られた資料を学校現場でどのように活かして実践ができるかについて、具体的な方法や検証を今後検討していく必要がある。
- 大会が終わった後に、事前学習と同様に事後学習にもその重要性があると考えられるので、その結果を得る必要があったと考える。

本研究を進めるにあたり、事前アンケートのさらに前に、プレアンケート等を実施することでアンケート内容の改善を図ることができたと考える。小学校 5 年生から高等学校 3 年生までの児童生徒に理解してもらえるように質問文を作成したつもりであったが、解釈に差が出てしまうような内容が含まれていた可能性がある。アンケート用紙そのものの評価について、設定しておけば、アンケートの精度も高まったであろう。

児童生徒の実態を把握したことでその意識に着目した授業づくりについて考えたり、意識の変容について系統性を考慮した内容の取組を検討したりする必要があるが、本研究ではそこまで至らなかった。意識の変容がみられたものが多数見つかったが、行動の変容にまで移すための手段について検討できなかった。福岡会場観戦招待事業に代わる手立てや取組を考えると同時に、授業で取り扱う内容や実施する時期について考えていきたい。

学校代表者の回答には、福岡会場観戦招待事業のような取組の経験や楽しさを参加していない学年の児童生徒にまで広げられなかったことや事前学習に時間をかけられなかったこと等の準備する時間の不足があげられた。本研究でも、研究の実際には、準備不足を感じる場面があった。早く計画的に準備をすることの大切さを改めて実感した。

引用・参考文献・使用ソフトウェア

<引用文献>

- 1) 日経 BP 山田久美 (2016. 10. 03) 「ゴールデン・スポーツイヤーズ」は、地方を活性化する千載一遇のチャンス 早稲田大学スポーツ科学学術院 間野義之教授に聞く
<https://project.nikkeibp.co.jp/atclppp/PPP/434148/092600003/>
- 2) 本間崇教・松岡宏高 (2016) 「みるスポーツの価値意識に関する研究」日本体育協会スポーツ医・科学研究報告集、pp. 24-32
- 3) 福岡県人づくり・県民生活部スポーツ振興課 (2018) 「福岡県スポーツ推進計画」
- 4) 福岡県人づくり・県民生活部スポーツ振興課 (2018) 「県民の運動・スポーツに関する調査報告書」
- 5) スポーツ庁 Web 広報マガジン (2018 年 3 月 15 日) 「『嫌い』を『好き』に変えるために—学習指導要領改訂〈小中学校・体育〉—」
<https://sports.go.jp/special/policy/new-curriculum-guideline.html>
- 6) 文部科学省 (2018) 「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説保健体育編・体育編」東山書房
- 7) 文部科学省 HP 「スポーツ立国戦略 基本的な考え方」
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1297207.htm
- 8) 福岡県教育委員会「福岡県児童生徒体力・運動能力調査結果報告書」
- 9) スポーツ庁 Web 広報マガジン (2018. 09. 20) 「『40 万』人もの外国人が日本へ！ラグビーワールドカップ 2019™ でホスト国に期待される効果とは？」
<https://sports.go.jp/special/value-sports/402019-1.html>
- 10) EY 新日本有限責任監査法人 (2016) 「ラグビーワールドカップ 2015 の経済効果 開催後分析」
- 11) 谷口勇一・松尾哲矢・荒井貞光 (1996) 「国際スポーツイベントの波及効果に関する社会学的研究 (1)」福岡大学体育研究、p. 27(1)
- 12) 谷口勇一・松尾哲矢・大谷善博 (1997) 「国際スポーツイベントの波及効果に関する社会学的研究 (2)」福岡大学体育研究、p. 28(1)
- 13) 山口志郎・押見大地・福原崇之 (2018) 「スポーツイベントが開催地域にもたらす効果」体育学研究 63(1)、pp. 13-32
- 14) 押見大地・原田宗彦 (2017) 「国際的スポーツイベントの開催が観戦者の行動意図に及ぼす影響」スポーツマネジメント研究 9(2)、pp. 3-18
- 15) 神野賢治・山本浩二・谷口勇一 (2012) 「国民体育大会が青少年に与える教育的効果に関する調査研究」SSF スポーツ政策研究、2(1)
- 16) 神野賢治・菊幸一・松永敬子 (2018) 「国民体育大会の開催が地域に与える社会的インパクトに関する研究」2018 年度笹川スポーツ研究助成報告

<参考文献>

- 文部科学省 (2017) 「小学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説体育編」東洋館出版社
- 文部科学省 (2017) 「中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説保健体育編」東山書房
- 文部科学省 (2018) 「高等学校学習指導要領 (平成 30 年告示) 解説体育編」東山書房
- 総務省 地域力創造グループ 地域振興室 (2017) 「ラグビーワールドカップ 2019 を通じた地域活性化についての調査研究 報告書」
- 野田敏孝 (2012) 「初めての教育論文 現場教師が研究論文を書くための 65 のポイント」北大路書房
- 福岡県スポーツ推進審議会 (2018) 「福岡県スポーツ推進計画の在り方について (答申)」
- 谷口勇一・荒井貞光・内海佳子 (1995) 「広島アジア競技大会の評価に関する調査研究」日本体育学会大会号 46(0)、p. 206
- 原田宗彦 (1993) 「スポーツの経済効果に関する一考察」日本体育学会大会号 44A(0)、p. 445
- 友添秀則 (2017) 「初等教育資料. 豊かなスポーツライフの実現」971、pp. 6-11
- 川崎登志喜・新出昌明・中西純司・斉藤隆志 (1996) 「スポーツイベントの経営評価に関する研究」

日本体育学会大会号 47(0)、p. 383

- 木村和彦・菊幸一・作野誠一・霜島広樹・中西純司・藤田雅文・松岡宏高・森丘保典・鈴木なつ未・石塚創也 (2016)「平成 28 年度日本体育協会スポーツ医・科学研究報告Ⅰ 新たなスポーツ価値意識の多面的な評価指標の開発ー第 3 報ー」公益財団法人日本体育協会
- 大木昭一郎・寄金義紀・高橋伍郎・宮丸凱史・森岡理右・阿部一佳・坂田勇夫・高森秀藏・松田義幸・宮下憲 (1991)「正課体育と生涯スポーツに関する調査研究報告」大学体育研究 (13)、p. 85-148
- 伊藤信之・齋藤隆史・嵯峨寿・柵木聖也 (1991)「筑波大学生の価値類型とその特徴に関する調査研究」大学体育研究 (13)、pp. 15-33
- 久湊(内田) 尚子・尾崎秀男 (1993)「高岡短期大学生の価値観とスポーツライフに関する調査研究」高岡短期大学紀要 (4)、pp. 55-66
- 浪越信夫・千葉久三・鈴木祐一・深川長朗 (1984)「国民体育大会開催のあり方に関する基礎的研究」、日本体育学会第 35 回大会大会号、p. 450
- 堺賢治 (1997)「スポーツイベントに関する研究」愛媛大学教育学部保健体育紀要 1、pp. 83-88
- 堺賢治 (1998)「スポーツイベントに関する研究(2)」愛媛大学教育学部保健体育紀要 2、pp. 69-75
- 堺賢治 (2000)「スポーツイベントに関する研究(3)」愛媛大学教育学部保健体育紀要 3、pp. 61-68
- 間野義之 (2015)「奇跡の 3 年 - 2019・2020・2021 - ゴールデン・スポーツイヤーズが地方を変える」徳間書店
- 日下裕弘・加納弘二 (2010)「生涯スポーツの理論と実際 改訂版」大修館書店
- 荒木雅信・鈴木一行 (2018)「これから学ぶスポーツ心理学 改訂版」大修館書店
- 石村光資郎 (2014)「やさしく学ぶ SPSS による統計解析」株式会社オーム社
- 寺島拓幸・廣瀬毅士 (2016)「SPSS によるアンケート分析」東京図書株式会社
- 笹川スポーツ財団 (2018)「スポーツライフ・データ 2018」
- 笹川スポーツ財団 (2018)「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究」
- 健康・体力づくり事業財団 (2019)「月刊 健康づくり」第 42 巻 10 号 (通巻 498 号)
- 体育科教育 (2019) 12 月号
- 体育科教育 (2020) 1 月号
- 福岡県体育研究所 (2015)「平成 27 年度 長期派遣研修員研究報告書」
- 福岡県体育研究所 (2016)「平成 28 年度 長期派遣研修員研究報告書」
- 福岡県体育研究所 (2017)「平成 29 年度 長期派遣研修員研究報告書」
- 福岡県体育研究所 (2018)「平成 30 年度 長期派遣研修員研究報告書」
- CiNii (NII 学術情報ナビゲータ)
<https://ci.nii.ac.jp/>
- J-STAGE (科学技術情報発信・流通総合システム)
<https://www.jstage.jst.go.jp/browse/-char/ja>
- World Rugby (2019)「World Rugby Year In Review 2018」
<http://publications.worldrugby.org/yearinreview2018/en/56-1/>
- ラグビーワールドカップ 2019 日本大会公式ホームページ
<https://www.rugbyworldcup.com/>
- (公財) 日本ラグビーフットボール協会公式ホームページ
<https://www.rugby-japan.jp/>

<使用ソフトウェア>

ソフトウェア①・・・「マークシート読取君 4」株式会社マグノリア
ソフトウェア②・・・「SPSS 25 STATISTICS BASE」IBM

おわりに

福岡県体育研究所に長期派遣研修員として1年間研修の機会を与えていただき、これから保健体育科の教師として歩いていく上で他では味わうことのできない貴重な経験をさせていただくことができました。その方々との出会いに感謝致します。

採用されて5年が経ち、授業だけではなく、校務分掌や部活動等、これから自分の色というものを出しながら、存在感を示すことが求められるようになるのではないかと自覚しつつも、何もできない自分の無力さを痛感していました。このタイミングでの長期派遣研修員の機会は自分を変えるチャンスではないかと考え、研修に前向きに臨もうと意気込んだことを覚えています。

しかし、研究では、何をテーマにどんなことをするのか、そもそも研究とは何なのか、すべてが分からないことばかりでした。日々の課題等なんとなく考えることはあっても明確に自分の考えを整理することができていませんでした。そんな私でも、スポーツに関する調査研究というこれまでとは違った研究を最後までやり遂げることができたことは大きな自信となりました。元号が令和に変わり、これから新しい時代を迎えるタイミングで、専門とするラグビーのワールドカップが日本・福岡で開催され、そのことに関する研究を行うことができたことは「一生に一度」の経験となったと思います。何度も挫折しそうになりましたが、2名の長期派遣研修員の先生方と *ONE TEAM* になり、乗り越えることができました。これからも「現状維持では成長しない」「新しいことに挑戦していく」ことを続けていきたいと思っています。

また、体育研究所が主催している専門研修や基本研修では、学ぶことの大切さや真摯に取り組むことの貴さを再認識しました。さらに、小学校・中学校の実態や各地域での取組等、高等学校だけではない幅広い視野を持てたことも私の財産になりました。現在の小学校の授業、中学校の授業を見ると、高等学校に入学するまでにどれだけ子供たちが大切に、丁寧に育てられてきたのかを実感し、小学校からの9年間で尊重した授業づくりや指導をしなければと思い直しました。今回の研究でも、小学校・中学校を含めた子供たちのことを考えることができました。また、保護者にもアンケートを取ること、家庭の実態についても改めて確認することができたと思います。

そして、今回の研究は大分大学教授の谷口勇一先生の御協力がなければとてもここまで進められませんでした。改めて感謝申し上げます。毎週のようにメールでやり取りをさせていただく中で、親身に御指導いただき、心温まる励ましの言葉に何度も救われました。御多忙中、「一緒になって勉強しましょう。」という先生の姿勢には、本当に多くのことを学ばさせていただきました。

最後になりましたが、このような貴重な機会を与えてくださいました福岡県教育委員会に厚く御礼申し上げます。なお、本研究を進めるにあたり、アンケート調査に御協力いただいた、全学校の児童生徒及び関係者の皆様に心から感謝致します。

また、御指導・御助言いただきました教育庁教育振興部体育スポーツ健康課、高校教育課、人づくり・県民生活部スポーツ振興課、ラグビーワールドカップ2019福岡開催推進委員会事務局、スポーツ科学情報センター、御理解いただき、サポートしていただきました小川所長はじめ体育研究所の指導主事の先生方、福岡県立太宰府高等学校の富田校長先生、森本副校長先生、清輔教頭先生をはじめ、保健体育科の先生方、諸先生方に併せて心から感謝致します。

今後とも、より一層の御指導、御鞭撻を賜りますよう、心からお願い申し上げます。

令和2年2月14日

長期派遣研修員 山本 崇弘（福岡県立太宰府高等学校）